

著 高木幸一
イラスト 庭

俺は まだ恋に 落ちていない

試読体験版



やまぐらあいに
山寺愛子



やましろいさむ
山城勇



たじろあみ
田所恵衣美



たじろあいら
田所詠羅

あかいまろ
赤井公



あかほりあかり
赤堀あかり



たちばなまこと
橘真



たじろゆういち
田所祐一

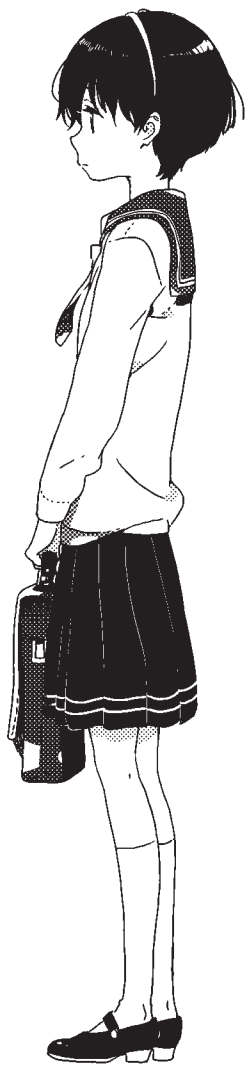


キミは運命の出会い、ってなものを信じるかい？

なに……自分に都合のいい場合だけ信じる？ 気が合うな！ 俺もそうさ。

でもほんとうは……誰かと運命的にめぐり逢う、ってのは、あるんだぜ。

第1章〜恋の訪れは空飛ぶ種のように〜



天気の良い日曜の朝からくそ重たいダンボールの山と格闘しなけりやならないのは、日々のちんけな悪行が積もり積もって今必然、どでかいなだれを起こしたからに違いない——くらい思わなければ納得できない。

「なーに辛気臭い顔にいよいよ磨きをかけてるの？ ジュース飲む？」

と、ニコニコ缶を差し出し出したダンボールの主に、俺は半眼を向けた。

「……まさかそれが、引っ越しの荷解きを手伝う礼……とか言うんじゃねえだろうな」
「やだなあ疑心暗鬼になっちゃって」

田所は茶色の短いクセつ毛をポリポリかきながら、細い目をこちらに向け、カン高い声でまくし立てる。

「これは心遣いよー。手伝いのお返しは、ちゃんとするって」

ヤツは糸目をいよいよ細めると、俺の頬に冷たいオレンジ缶を押しつけてきた。ちなみに今、十二月である。ほこりが立つと言って窓は全開。暖房器具はハコの中。嫌がらせか。

「んじゃ張り切っていきましょー。そのDVDはこの棚に並べてね。あ、アイウエオ順によろしく！」

田所は俺と同じく休みをつぶされた山城にも缶を押しつけて、作業を促している。ヤツはひとくくりにした着いロンゲに三角巾、そしてエプロンという、せつかくのイケメンも形無しのお掃除スタイルで、あつかましい友人の頼みにブツクサ言いつつ応じていた。

ちなみに山城の髪が着いのは三日前からで、その時わけを聞いても教えてくれなかった。ゆえに放置しているが、そのうち田所があの手この手で聞き出すだろうから、同情している。俺はダンボールからのぞく大量のDVDにため息をつきながら、ふと早朝のことを思い出す。

まだ薄暗い、冷やかな朝。俺は暖かな布団に包まれて、可愛い女の子と楽しく過ごす夢を見ていた。が、ピロピロピロうるさい電子音で冷やかな現実へ引き戻され舌を打ち、携帯に映る「田所」という文字に顔をしかめながらボタンを押した。

「……はい。なに？」

「あ……赤井。助け……」

「——どうした！」

思わず飛び起き、携帯に耳をすました。

「……腹が……痛くて動け……。今……山城の……アパート前に。山城は……コンビニに行っていて……」

「分かった！ ……じっとしてろ！」

俺は床に脱ぎ捨てた、青のすすけたジーンズへすばやく足を突っ込むと、いつもの蒼ブルズンをひっかけて、平机に投げ出した財布と鍵をつかみ取り、表へ出た。中学からの愛車

に鍵を差し込んで、一気に坂を急降下。朝早いので車も少なく、爆走立ちこぎのかいあって、俺は数分で山城のアパートへたどり着いた。

そうしてカンカン音を立て、二階へ上がると、廊下の果てにうずくまる田所の姿があった。なので息を整えつつ足早に近づき、そつとヤツを抱き起こした。

「……大丈夫か？ 救急車呼ぶか？」

「……いい。それよりこれを……」

差し出されたのは、部屋の鍵。

「これで開けるんだな？」

俺は田所を柵にもたれさせ、山城の部屋へと近づいた。が、

「違う……こっち」

と、田所が指差したのは、山城宅の隣の部屋。表札が掛かってないが、俺は言われた通り鍵を開け、田所を抱き入れた。

するとヤツはすぐさま玄関横の個室へ駆け込み、非常に不愉快な音を立てた。個室とは、トイレである。

数分後、実に晴れ晴れとした顔で田所が出てきた。

「やくサンキュサンキュ。一時はどうなることかと！」

そう言うってバンバン肩を叩くムカツク阿呆に、しかめ面で見返す間抜けの俺。これが一時間前の出来事である。



「……俺を呼び出す必要あったのか？」

DVDのタイトルを確認しながら、独り言のようつぶやく。山城は新聞紙を解いて、色とりどりの皿や茶碗をカチャカチャ重ねつつ答えた。

「だまされたに決まってるんだろ。今やっていることのためだよ」

そこへ田所・口八丁・祐一が割り込んでくる。

「やだなあ山城。説明したでしょ？ オレもお前のあとを追って、コンビニに行こうとしたら、急に腹が痛くなったの。急にだよ？ で、とっさに赤井へ電話しちゃったわけ。親友だからね」

と、こちらを見やる自称心の友。俺はため息をつき、なげやりにうなずいた。

そもそもコイツは中学以来こんなだから、考えるだけ時間の無駄。田所は我が意を得たりと満面の笑みで拍手を打ち、それから俺と山城の肩を引き寄せ、ささやく。

「……でもホント、荷解き手伝いのお礼は、期待しておいてよ？ 作業の疲れなんかふつと

ぶんだから。……今八時か」

そう、悪趣味なキンキラ腕時計を見やって、

「では！ あと一時間で片付けてしまいまっしょー。ダツシユだっしゅー！」

「はあ？ なんて？」

俺の質問から逃げるよう、田所は解かれた食器類を台所へと運び去った。俺は山城を見る。

「……そういえば、お前はなんで手伝ってるわけ」

「親友だから、だろ」

と、顔をしかめてテキパキと作業を続ける。なんかコイツはだまされたというより、弱みを握られているような気もする。どっちにしろ哀れなことだよ。お互いに。

一時間後、俺と山城の健闘もむなしく、なんとかコタツを出せたくらいで、田所の膨大な私物はまだ半分ダンボールに眠っていた。その主な原因は、手伝うよりも、半分応援団になっていたヤツのせいである。いい性格してるよホント。

「ひとまずおつかれ！ まあこれでも飲んでよ」

「いらねーよ。それよかヒーターつけてくれ」

俺はコーラを押しつける糸目の手を払い、窓を閉め、コタツにもぐりこみスイッチを入れた。慌てて出てきたせいで、ブルゾンの下は寝巻きの、白い長袖シャツ一枚なのだ。うー

寒い寒い。

ヤツはヒーターをセットすると満足そうに新たな城を見まわして、

「うん。まだまだではあるけど……ともかく。——祝！ ひとり暮らしおめでとー・オレ！」

と、拍手した。俺と山城はハイハイと相槌を打ち、息をつく。

田所はそこにまじらず、携帯をチェックしながら玄関へ歩き、

「ちよーつと迎えに行ってくる。待ってるねー」

そう言い残して出て行った。

俺は首を傾げる。

「なんだ……ほかにも犠牲者がいたのか」

山城はダンボールに囲まれたまま、雑誌をめくりつつ答えた。

「ひよっとしたらあちこち声かけてたのかもな。引っ越し祝いパーティーとかで」

「マジかよ。帰り遅くなるかもしれないじゃん」

「そうだったら大富豪でもするか」

俺はかぶりを振る。隣のお前はいいだろうが、こちとら夜の八時を越えたくらいでも、頭のチョー固い母親に許可取らなきゃならないんだよ。彼女と一緒にならそれくらい厭われないが、そんなもの、いたためしがない。つまり、なにが悲しくて年中ツラ突き合わせてる

ヤローのために面倒しなきゃならないんだってこと。お礼とやらをもらったたらソッコロ帰ろつと。

俺はコーラの缶を突きつつ、山城へ話しかけた。

「そういえば映子ちゃんは？ まだ寝てるの？」

「外泊してるよ」

と、ムスっとした顔。俺は苦笑する。

「よく許したなあ。まあもう高一だしな。友達とお泊まりくらいするだろ？」

「……男もまじってる」

「え？ マジで？」

「クラスのヤツらと、クリスマス会の準備の計画やら買い出しやらで、金持ちの女子んちに皆で泊まるんだと。クリスマスマストってなあ……きょうまだ四日だけ？ おおかた夜中まで騒ぎたい連中が大義名分として、考えたこつたるよ」

「それはそれは……。シスコ……妹思いの兄としては心配だろうな」

山城はうつむき、どんよりとした空気を放つ。部屋に入ってこんなのをいたらビビるぞ。

「……しょうがねーじゃん。クラス全員って言っし。ハブにされたら可哀想だろ。おとなしいヤツだし。みんなと仲よくする機会があるなら、参加するに越したことはないよ……。それにいちおう監視はつけておいた」

訝しがる俺をよそに、山城はゆっくり顔を上げた。

「田所の妹の友達が、映子と同じクラスなんだよ。だから間違え起こさないよう、一緒に行動してくれないか……って頼んだんだ」

「田所経由で？」

弱々しくうなずく。なるほど。ここにいるのはそういうわけか。平日バイトづくめのコイツが休みをこんなでつぶすとは考えられないからな。まーなんというか、映子ちゃんの純潔が守られますように。もしなんかあったら、コイツなにするか分かんないし。

俺は話題を変えるよう努めて明るく言った。

「そういやあ田所って妹いたんだな。やゝ、ぜんっぜん知らなかった。アイツなにも言わないんだもん。お前、前から知ってた？」

「最近な。先月一緒に遊んだから。おれんちの隣に引越す話もその時出てた」

「俺だけカヤの外かよ……」

やや口をとがらせ缶を弾く俺に、山城はようやく明るく顔をみせ、ニヤツとする。

「『田所のカヤ』に入ったって、いいことあるか？ むしろ喜べ」

「……それもそうか」

そう、ふたりして笑った時、ガチャガチャノブがまわされて、噂の主が帰ってきた。「たっだいまー。おなか減ったろ？ すっごくいいものがあるよーん」

趣味の悪い真っ赤なコートを揺らしつつ、ニコニコ入ってくる。なんだ報酬って弁当かよ、とガツカリしながら顔を上げると、見知らぬ女がふたり、ヤツの後ろに立っていた。

「うわー、けっこういいじゃんいいじゃん！ ワタシもここに住もつかない」

「駄目。いつまでたつても、片付かなくなるでしょ」

「……ソレ、どーゆー意味よ」

「そのままの意味よ。分からない？」

なにやら美少女たちが部屋を着にキヤイキヤイ騒いでいるが、なんのこっちゃと田所を見る。が、ヤツはそんな俺を無視して、コタツの上に風呂敷包みをドカンと置き、

「なーんと朝ご飯はカワイイ女子たちの手作り弁当だよーん。じゃっじゃーん！」

と、すばやくもぐりこみながら、得意そうに俺たちを見た。

「さ、食べよーぜい！ いやー腹減った腹減った。あ、お前たちも座りなよ」

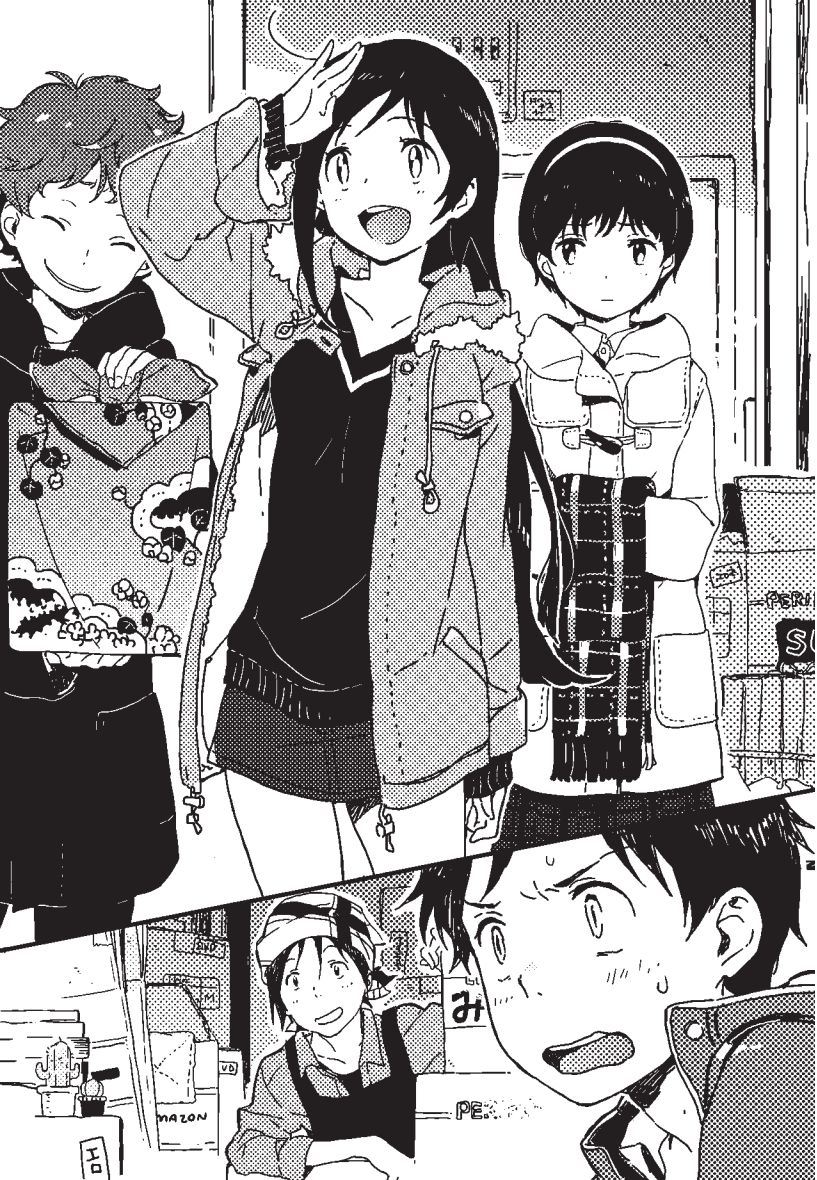
田所は風呂敷を解きつつ、立ちっぱなしの女子ふたりを促した。彼女らは顔を見合わせたあと、空いた一辺へ、並んでしずかに腰をおろす。

「……えーと。田所君。どちら様？」

俺は右手のふたりをチラ見しながら尋ねた。すると田所が答える前に、

「妹です」

と、俺に近いほうの子が言った。なのでそのまま、向かいの席へもぐり込んだ山城を見る。



ヤツは首を振りつつ、

「おれが会ったのはこっち」

と、もうひとりの子を指差した。

「ヤマさん久しぶり〜この間はどうもっ！ ……髪、どしたんですか？ イメチェン？」

合わせるように、その子が笑顔で手を上げて、山城へ髪について話しかける横で、重箱を並べ終えた田所が自慢げに言った。

「そ。このカワウエイふたり組は、我が家自慢の姉妹なのでーす。今山城に挨拶したロングのほうが恵衣美で、高校一年。シヨートが詠羅で、中学三年。ほら赤井、なにか言えよ〜」

「あ、ああ。俺、赤井公。高校二年……って言わなくても分かるか。田所とはその山城と同じ、中学からの付き合いだよ。よろしくな」

俺は促されるままふたりへ会釈する。恵衣美ちゃんは「チイス」とグーパーしながら笑顔で応じ、詠羅ちゃんは「はじめまして」としずかに頭を下げた。

続けて山城が詠羅ちゃんへ挨拶している間、改めてふたりを見る。

グーパー少女はブラウンジャケットの下に薄手の黒Vネックセーターで、歳に似合わぬグラマラスなラインが目やり場に困る。下も赤いミニスカートの素足だったし。寒くないんかい。

他方、慇懃女子は白いダツフルコートに、白ブラウス&紺セーター。下は厚手の、チェック

が入った暖色のロングスカートだった。

まさに対極。髪はロングにシヨート、目はまんまと切れ長、身長こそやや小柄で同じくらいだが、恵衣美ちゃんはグラマーで、詠羅ちゃんは細身。その他、髪が黒いこと以外ぜんぜん似てないし、不思議な姉妹だ。まあそれを言うならいちばんのミステリーは、こんな美少女らの兄貴がコイツだということだが。

「ん？ この卵焼きウメーっ！」

俺の訝しげな視線を気にもせず、くだんの彼はバクバクおかずを放り込んだ。山城も食べ始めるので、俺もハシを手取る。どれ……。ではまずエビフライから頂こうじゃないか。

「……うまつっ！」

「おっ、いいリアクションですね〜っ！」

恵衣美ちゃんが俺を指差してくる。そしてなにおかしいのか、キヤツハッハとカン高い笑い声をあげた。……ああ、こういうところはそっくり。

「そのエビフライは私が作りました」

と、コートを畳んで詠羅ちゃん。俺は彼女の顔を見やって、にこやかに言葉を返す。

「あ、そうなの？ うまいよすぐく。バッチリ」

すると詠羅ちゃんは目を半眼にしてニヤツ……と口の端を上げた。え〜っ!? なんてそんな

笑い方すんの！ なにか入ってるのかこれ……。

俺が固まっていると、隣の恵衣美ちゃんが無造作にジャケットを脱ぎ捨て、おおきなため息をつき、ちいさくかぶりを振ってえらく冷たい顔になった。

「もーエイラってば。いい加減、その鬼が血の池地獄に落ちた人間のおぼれるサマに、ひとりほくそ笑むような笑い方やめなよ。コウさんがおびえてるじゃん」

「……なに言ってるの。私は今、傷つき倒れた前線の兵士へそつと舞いおりた天使のように、温かく微笑みかけたのよ。眼球腐り落ちている？ それとどさくさまぎれにいきなり初対面の殿方を下の名前で呼ぶなんて、さすがは世界のトップブリーダーも絶賛するメス犬エイミ。何人も男をとつかえひつかえしている履歴は伊達じゃないわ。その手口、少しは学ばせてもらうことにする」

「あーん？ 誰がとつかえひつかえしてるって？ 勝手に言い寄ってくるウザイヤツらに文句言えよこのサルノコシカケがあー」

「過去現在そして未来、私となら関わりの持たない菌類ごときを比喻に持ち出し悪態つくところが、なんとか阿呆な自分より下に見せかけようというまさにサルノコシカケならぬ猿の浅知恵。これは一本とられましたわお姉様。年の功ですね。さすがシワの数だけ知恵がある夢がある無駄がある。フフフツ」

「――表に出ろやくソガキイ！」

「上等。三枚おろしにしてあげる」

……ええ〜と。な、なに、これ？

あまりの出来事に石地蔵化していると、同じような山城と目が合って正気を取り戻し、同時に立ち上がると、ヤツは恵衣美ちゃん、俺は詠羅ちゃんを押さえ込んだ。

「ヤマさん放して！ コイツはいつべん、故郷の地獄に送り返すべきなんだって！ 鬼どもがさびしがってる！」

「すみませんが今すぐ私を解き放つて下さい赤井様。この猿のしつけには長年培った特殊技能が要るのです。人家に害なす前に山の奥深くへと送り返さねば」

とりあえず俺たちは、放すとヤバいことを悟った。ふたりして後退しつつ、のん気に重箱を突き続ける兄貴殿に俺はまくし立てる。

「オイコラなんとかしろ！ から揚げと妹、どっちが大事なんだ！」

「そんな哲学的な問いかけを、こんな天気の良い休日の朝にされても困るよお。あはつ」と、モツシャリクツチャリ。困ってるのは俺たちだっつーのポケ！！

俺は舌打ちし、頭をフル回転させるも名案浮かばず、困った末、なに気なくアゴをひいたら、詠羅ちゃんの頭にはめられたカチューシャに気づいて、さげぶ。

「――あ！ これ可愛いねえ！ カチューシャ！ すっごくきれいだよ。こはく色で！」

「……分かりますか」

すると急にイノシシ的パワーが消えうせ、小柄な体相応の軽さを取り戻した詠羅ちゃんはクルリ振り向き、またもや半眼で口の端をニヤツと上げて、その飾りを指差した。

「これは祖母の形見なんです。とつても大事で、すごく気に入っています」

「ワタシだつておばあちゃんのカタミ、持つてるし！」

恵衣美ちゃんが対抗するよう、左手首のブレスレットを皆に見せる。それもこはく色だった。山城が空気を読んで「いいね。なんか気品あるよ」と言うのと、満面の笑みを浮かべた。

俺たちはホツと息をつき、なんとかかさつきに戻らぬよう、それぞれの肩を押し押し着席させたところ、田所がハシをポーンと重箱に投げ出し、

「あー美味しかった！でもちよーつと、食後のデザートなんか欲しいなあ。恵衣美、詠羅。悪いけどそのコンビニでなんか買ってきてくれない？皆の分ね。おツリあげるからさ」

と、五千円札をふたりに差し出した。するとしばらく沈黙したあと、ため息をついてふたりは立ち上がり、恵衣美ちゃんが札を取った。

「……そうね。ちよい頭冷やしてくる。あ、おツリはちゃんと返すから。コウさん、ヤマさん。なんか欲しいオカシとかあります？」

「あー……、じゃあ俺チヨコットポジット」

「おれはカンガルスナック」

「オツケーオツケー。んじゃ」

それからふたりは無言のまま、コートを羽織って出て行った。俺は不安げに玄関を見る。

「……大丈夫かよ。俺か山城がついていったほうがいいんじゃないか？」

「のんのん。ばあちゃんの話が出たあとは、しばらくおとなしいの。ナイスだったね赤井」と、ケラケラ笑う。そしてとつぜん真顔になると、俺と山城を交互に見やって言った。

「……ま、見ての通り仲悪いんだあのふたり。去年の夏にはあちゃん死んでから、ますますひどくなつちつた。襖障子破れるレベルだもん。居たたまれなくつてさ。ぶつちやけオレ、逃げてきたんだよね。受験勉強するためって言ったらオヤジ許してくれたよーん」

「……ぶつちやけすぎだろ」

よく考えたらコイツの家はどこかい和風屋敷でリッチな個室はあるし、お手伝いさんやその他たくさん使用人の人までいるし、小遣いもたんまり。ひとり暮らしの利なんてほとんどないどころか自炊だなんて却って不便じゃね……と思つてたら、そういうことか。

山城がため息をつきながら、ヤツを横見する。

「言つとくけど、おれん家に飯たかりに来るなよ。自分で作れ」

「もう器がちっこいね山城は。心配しなくても自分のご飯は持つて行くから一緒に食べようぜ。さびしいじゃーん」

「駄目！ぜつたい駄目！」

仲むつまじい妹とのふたり暮らしを当パートにて、もう一年半ほど送る山城は、幸福に満ちたその城を阿呆に侵略されぬよう、決死の抵抗を見せてはいたが、田所のにちゃにちゃ強圧外交に勝てるほど意志も口も強いとは思えない。週に二、三回は覚悟しなきゃならないな。アーメン。

俺は勝負にならない駆け引きに、終止符を打つよう言葉を放つ。

「えーっと、俺彼女らが帰ってきたらオイトマするから。また今度な」

「あ、赤井のママさんにはオレから言つといた。きょうの十一時に戻ります〜って」

「——はあ？ おま、いつ電話したの！」

「妹を迎えに行く時。チョー根掘り葉掘り聞かれたけど、納得してもらえたよ〜ん」

と、携帯を見せびらかしてニコニコする阿呆。……頭痛え。

しかしあの歩くPTAに十分足らずの交渉で勝つたとは……。コイツなに言ったんだ。俺に不利になるようなこと、まくし立てたんじゃなかるうな。……帰りたくなってきた。

ますます寒くなつて、コタツに深く入り込む。すると田所は意味ありげに、ゴホンと咳をしてから俺たちに向き直ると、なにやら差し出した。

「で、きょうのお札だけど、これね」

俺と山城の前に、それぞれ短冊のような紙が置かれ、見るとそこにはえらくカラフルな色、凝ったデザインがほどこされており、中央には青のゴシック体で「アタックけん」と書かれ

ていた。

山城が怪訝な顔で紙を見る。

「……なにか知らないけど、イヤ〜な予感がするからおれはパスな」

「えっ？ いいのお？ 後悔するよ〜こんなことめつたにないんだから」

「キサマのお札や善意が、そのまんまであつたためしはない。赤井にやるよ」

と、山城はスス〜と紙をすべらせて、こちらによこす。眼下に二枚の自作チケットが並んで、俺は顔をしかめた。

「……お前、まさか肩叩き券とか、そういう類のオチじゃねえたらうな」

「ちっがうよお。それはね、妹たちに交際のアタックをしてもいいよ、っていう、兄公認の許可証だよ。『権利』と『券』をかけて、『けん』ね。面白いでしょ？」

「……やっぱ俺、帰るわ」

痛む頭を押さえつつ立ち上がると、コタツの中から足が伸びてきて、カニばさみされた俺は直角に倒れ込んだ。

「いってーな馬鹿！ なにしやがるー」

「短気は損気と言うでしょ。哀れな山城くんはそのせいで、シスコンから脱するいいチャンス逃したんだから」

「だ〜れ〜がシスコンだよ！」

「じゃあ映子ちゃんに彼氏ができて、いいんだね」

「はあああああああ!? い〜〜〜〜〜わけないだろっ!? 馬鹿かキサマはっ!!」

「それをシスコンと世間一般では言うのだよくん。キャハッ」

「——お前ら! ちよつとそんな分かりきつた話はやめろ!」

俺は頭を押さえてふたりに割り込む。

「おい田所。お前はたいがいなヤツだけど、今回は冗談じゃあ済まされなれど。これもあろくに妹をダチに売るなんて、なに考えてんだよ!」

すると田所はチツチツと指を振り、困った子に言いつけるようつぶやいた。

「早とちりはいか〜ん。誰も妹を好きにしているなんて言つてないでしょ。あくまでアタックしてもいいよ〜ってだけ。つまりね。この『けん』が渡される人は、とっても限られてるの。お前たちふたりだけだつてこと。それ以外のヤツは、オレが許さないから」

と、半眼になり、口の端を上げニヤツ……とした。……おい。詠羅ちゃんの笑い方、なんか既視感あると思つたら、お前譲りかよ! あの子、それがいい笑顔と勘違いして育つたんじゃないの?」

山城が訝しげに田所を見やり、口を挟む。

「でも……恵衣美ちゃんはさ。さっきの口論聞いた限りじゃ、けつこう付き合いあるんじゃないの? 男と」

「友達以上は、ないよ〜。だつて、え〜つと。八人くらい……だつたかなあ」

そう言つて指を折る田所。な……ななが「だつて」で「だつたかなあ」なんだ? ひよつとしてお前、なにかしたのかよ……。

「あー、今オレのことシスコンだ〜、とか思つたでしょ〜。のんのん。俺はいい男とならオツケー。コイツは誰が来ても駄目。ゼンゼンチガイマース」

山城を親指で示しつつ、ケラケラ笑う自称健全兄。そこでまた醜い争いが勃発しそうになつたので、俺はさげんだ。

「わりつたわりつた! お前はいい兄貴だよ。俺の勘違いだった。すまん。……けどな。こんな紙を渡されて、アタックしてもいいですよつて、お前ねえ……。根本的なことを忘れるよ」

その言葉に、ふたりは瞬く。俺は軽く息を吸い込んでから、真顔で答えた。

「俺はまだ……恋に落ちていない」

「ブ————ッ!!」

ふたり同時に噴き出して、醜い奇声を発しまくるとバンバンバンバンコタツテールを叩き出した。俺は真っ赤になってまくし立てる。

「オオオイコラなに受けてんだお前ら! だだだつてそうだろう会つたばっかなんだから!」

田所は涙を拭きながら、何度もうなずき、やがて真顔を作つて俺に言い放つた。

「俺はまだ……恋に落ちていない。理由は……会ったばかりだから」

「プ~~~~~~~~ハッハッハ!! し、シヌ~~~~~~~~ッ!!」

「——てめえら表に出やがれえ!! 決闘だコラァ!!」

「たっだいま……。……あら。ずいぶん盛り上がってますね〜」

明るくて、よく通る声^{こゑ}が耳に入り、慌てて振り上げた拳をおろすと、俺は短冊二枚をブルゾンのポケットへ押し込んだ。チツクシヨ〜今度覚えてやがれ。

「そぞ。楽しいお話ししてたのよ。ね〜赤井イ?」

俺はコタツの中でヤツの脚を蹴りながら、相槌を打つ。恵衣美ちゃんと詠羅ちゃん不思議そうな顔で買い物袋をおろした。

その後、お菓子を皆に振り分けながら、恵衣美ちゃんが申し訳なさそうに言った。

「実はさつき、るー子からメール来てさあ。ちょい行かなきゃならないんだよね。悪いけど遊べなくなっちゃった」

「おけおけ。ご飯美味しかったよ〜ん。またいつでもカモン」

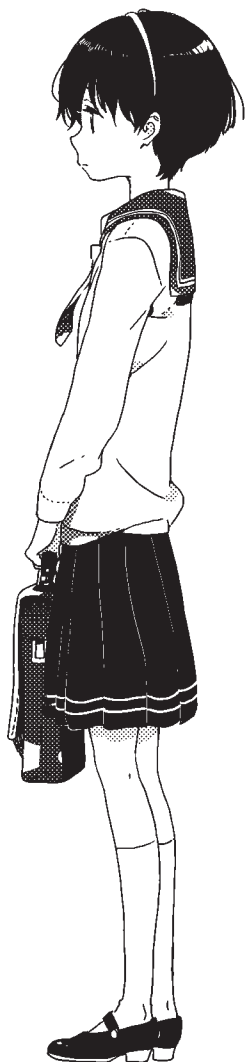
「らじゃー。つーか晩来れたら来るかも〜。るー子次第だけだね。んじゃコウさんヤマさん。まったね〜」

そう笑顔で手を振り、俺たちがそれに応^{こた}えるときピースを作って、足早に出てゆく。田所はニヤニヤしながら俺と山城を見やり、つぶやいた。

「どうどう。クラっとくるでしょ〜」

「フン。『けん』の所有者に聞けよ」

山城は横を向く。俺はラクダのマーチを開けている詠羅ちゃんを見、ゴホンと咳をした。



第2章〜恋の絵札はダイヤのクイーン〜



少しの間、菓子を頬張ったのち、俺は皆に言った。

「さて。せっかくコタツを囲んでいることだし、トランプでもしようぜ。山城、大富豪したいとか言ってたよな」

「けど四人じゃ『平民』ナシになるしなあ。……ババ抜きにしない？」

「あの」

右横の詠羅ちゃんが手を上げて、につこり愛らしい笑顔を浮かべると、俺に言った。

「私は7並べがいいです」

「ふーん……。じゃ、それにしようか。しかし7並べなんて久しぶりだなあ」

「おれは映子とけっこうやるぜ」

と、向かいの山城。……お前ふたりで7並べやるなよ。

「水差しちやつて悪いんだけどお、うち、トランプないよ」

お前……。あんなにDVDやら遊具を持ち込んで、トランプひとつ持ってきてきてないのかよ。

「しゃーない。おれが持つてくるよ」

と、山城が立ち上がるうとした時、詠羅ちゃんがコートのポケットから、なにかを取り出しテーブルへ置いた。……トランプだよ。

「おー！ さつすが詠羅！ 準備いいね！」

「占いを嗜みますから。常に携帯していますよ。ちなみにきょうのお兄様の運勢は最悪です」

「まっじでえ。うゝむ悪運なすりつけっ！」

「ばっ！ やめろキサマ！」

猫のようにじゃれあう田所たちに、ため息をついていると、詠羅ちゃんがこちらを見つめた。

「赤井様は占いを信じますか」

「え？ うゝん。自分にいい結果は信じるかな。悪いことは忘れる」

「いい加減なんですね」

直球だな……。はは。

「じゃあきょう運勢最悪のオレが切るよゝん。皆に不幸をおすそ分けっ」

「……俺がやろう」

悪魔の手からカードを取り上げ、さっさと切る。皆に配りつつ、俺は山城に尋ねた。

「映子ちゃんが帰ってくるのっていつ？」

「……きょうの午後八時だ」

と、暗い声。なるほど……。察するに、それが映子ちゃんに対する門限の、ギリギリ許容ラインっぽいな。お前はうちの母親か。

「……そうか。ならそれまで付き合えよ。さすがに何時間も、田所と絡むばっかじゃ疲れるし」

「もー照れちゃってえ。オレと赤井の仲じゃゝん。ちゅっ」

「キモイの飛ばすな！」

空を手でバタバタしていると、詠羅ちゃんが明らかに、ヤなものから身を退くよう距離をとる。俺は田所の頬を思いっきりひねり上げた。くそう、アタックを勧めたお前が俺の株を下げてどーするよ。

……と、考えて我に返る。あれ……俺けっこう真に受けてね？

「ところで皆様。ひとつ提案があるのですが」

「——えっ、なに？」

とつぜんの問いかけにドキッとし、声を出す。そんな内心露知らず、詠羅ちゃんは俺の手にあるカードを無表情に見つめてから、顔を上げた。

「なにか、賭けませんか。あ、お金ではないのでご心配なく」

「賭ける……って、7並べに？」

俺の問いに、うなずく彼女。ふーむ。賭け事とか忌み嫌ってそんなイメージあるけど、そんな固い子じゃないみたいだな。

「いいねえ。そのほうが盛り上がるし！じゃあオレは負けたらランニングシャツ&パンツで駅前に昼ご飯の買い出し行ってくるよ！」

「おれはどうしよっかな。ガツコの校庭で腕立て腹筋スクワット各百回、とかでもいい？」

お前ら、罰ゲームのレベル上げてんじゃねえよ！

イヤ々な予感がしていると、果たしてふたりは、ニヤニヤ鬱陶しい視線を投げつけてくる。

「聞いたよね。赤井。空気読んでね」

「男を見せないとな」

「……じゃあ部屋でスクワット三十回」

声を発したと同時に、コタツ内で足が二本飛んできた。イティ！

「赤井様。赤井様が嫌いな食べ物はなんですか？アレルギーではなく、単純な好き嫌いで口に入れることすらしたくないものです」

「えっ？えーっと……ピーマンかな。小一の時以来食ってねーし」

「ではピーマンを使った料理を食べるということで、お昼に私が作って差し上げます」

と、ニコリ。まさに天使の微笑みだった。——キミ、その笑顔出すとこ間違ってるから！

「今どきピーマンが食べられないって、赤井ってコッドモ〜」

「お前、ピーマンは栄養たっぷりなんだぞ？いい機会だから存分に食べ」

「まだ負けると決まってねーよ！」

チツクシヨ。田所の阿呆意見ならソッコー反抗するが、彼女の天使スマイルを見ているとそれでもきん。これは絶対負けられないぞ……。

「皆様のチップが出揃いましたね。では私の分を」

詠羅ちゃんはちいさく息をはくと、俺たちを見まわして言った。

「私が負けたら、皆様のご希望を、それぞれひとつずつ叶えて差し上げます」

「え……マジで」

俺が不安げにつぶやくも、彼女はまったく動じずに、

「はい」

とうなずいた。とびきりの笑顔で。

「……おい。止めさせたほうがいいんじゃないか？」

兄貴に耳打ちしたが、ヤツは顔も動かさず横目で見、

「自分の心配したほうが、いいと思うよお？」

と、のたまった。なに……？ そんなに強いのか？ いやでも7並べだぜ。配られるカード運が大部分じゃないか。

「ぐ、ぬぬぬ……」

十分後、うなっているのは俺、笑っているのは彼女。ニヤニヤしているのは野郎ふたり。

おかしい……おかしいでゴザルよ！

「オイコラ。ダイヤの9止めてんだろ。バレバレなんだよ」

俺は田所の足を蹴りつつ、つぶやいた。が、そっぽを向いて、口笛まで吹き出す始末。

「てめえはクラブの2だ。いい加減にしがれ」

山城を睨みつけるも、「ワタシ・ニホンゴ・ワツカリマセーン」てな顔で笑いやがった。

チツクシヨ〜コイツラ……コイツラ。ゲルになって俺を最下位にしようとしてやがる！

「仕方ないですね」

と、ため息をついて詠羅ちゃんがスペードの6を置いた。おおっ！ とうとう俺のターンがめぐってきたぜ！ ふははははは！

そうして、今までたまった鬱憤を晴らすよう、俺は力強くスペードの5を置いた。次に順番が来た時は4を、その次は3。……が、1はあっても2がなく、それで打ち止めだった。横を見ると、美しい顔が目映る。こちらの視線に気づいた彼女は、再び天使のように微笑んで、俺が内心デレっとした瞬間……スペードの2を置いた。

「私がいちばんですね」

「オレにっばん〜っ」

「そしておれが三番として今……かろやかに降り立つ」

——うるせ〜よポケッカス！ なんだこの仕組まれたような上がりっぷりは！

手持ちのカードをポロポロ落として、俺が顔をしかめていると、詠羅ちゃんがいていねいにそれを拾い、天使の微笑みを浮かべたまま言った。

「お許し下さい赤井様。すべてはあなたの好き嫌いを治すため、私を始め兄たちが協力して行つたこと。でも不正はしていません。なんと云いますか……赤井様は心が丸見えでした

ので」

思っていたことがモロ出てたってことか。うぐ……。

「私としては皆様のチップを比べると、赤井様以外の負けには喜びがありませんから」

そうして、いちだんと天使スマイルを強めた。心なしか美しいショートヘアの髪が、ふわりと揺れた気がする。め、めちやめちや可愛い……。負けたのになんか負けた気がしないぞ。

詠羅ちゃんが席を立ったあとでもデレデレしていると、田所がニヤニヤしながら耳打ちする。「その表情、いい感じなんだけど。だからこそ後学のため教えておいてあげる」

「な、なんだよ」

「あの子の笑顔はね。天使と悪魔が逆なの」

「はあ？」

「とびきりの笑顔は、悪い子になった時の表れなんだよ」

なんだと？ と、いうことは……嬉々としてハメてたのかよ！ こ、怖え〜っ！

「ま、でも反応は上々みたいだねえ。うんうん」

肩をぼんぼん叩き、離れてゆく。しばらくのち、彼女も戻ってきたが、目を合わせても、天使の微笑みは消えていた。ホッ。

その後もページワン、神経衰弱、ババ抜き、果ては山城が持ち込んだオセロや将棋に至る

まで、最下位が変わるだけで彼女の完勝。ずっと天使の微笑みを浮かべていた。それがいちばん向けられたのは、俺。……どうやら変な意味でロククオンされたようだった。

「じゃあオレ、昼ご飯の買い出しに行ってくるね。う〜っ、さっむそうだなあ！」

と言いつ、人の目構わず脱ぎ散らかすと、筆筒をこそごそやってランニング用のシャツと短パンを身にまとう。ちなみに上下ともサイズピッチピチ、色真っ赤っかである。うわあ……。暖を取るため足踏みし己の体を抱きつつも、なぜか嬉しそうな田所。もはやまごうことなき変態であった。

「おれも学校まで行かなきゃならん流れだな……。仕方ない」

山城が立ち上がり、エプロンや三角巾を脱ぐ。田所がその肩をポンと叩いた。

「不正をしないよう、オレがコイツを見張るから、ふたりとも心配しないで待っててね〜っ。じゃ、行こっか」

「キサマ、その格好で隣歩くなよ！ おれまで変態と思われるだろうが！」
 なんのかんのと言いつながら、ふたりは寒空に消えた。合掌。

ドアの閉まる音を最後に、嵐が去ったよう部屋はしずまり返った。俺は気まずくなり、散らばったゲーム類を片し始める。それに做つて詠羅ちゃんも手を動かした。

「あつ」

と、声を出したのは俺。将棋のコマを拾う際、詠羅ちゃんの手をつかんでしまったからだ。ごめんと謝りつつ、我ながらどこのラブコメだよ……とは思ったが、向こうはなにも気にすることなく、黙々とコマを拾い続けていた。

時計の音がやけに響く。どうやら俺ひとり、変な世界に迷い込んでしまったようだ。確かに彼女がいたことはない。が、クラスで馬鹿話をする女友達くらいはいる。ふたりに遊んだこともあるし。なので幾ら可愛い子とふたりきりだといってもそんな緊張するはずはない……と思っていたが、これは田所の術中にハマられたっぽい。そういうことにしておく。

「赤井様」

「はいっ？ —— はいはいはいごめん、なに？」

素っ頓狂な声で応じ、慌てて言い直す。詠羅ちゃんは瞬きながら、言葉が続けた。

「赤井様はクラブ活動をなさってますか」

「え？ いやあ……。入ってないけど」

「では放課後はどうに？」

「……夕チと遊んだり、その辺ぶらついたり、マンガ読んでたりしてるかな」

「私は古い研究部に入っていました。もう引退しましたが」

「へえ。何人くらいやってたの」

「五人です。近隣ではそこそ有名で、学園祭などで人気があるんですよ。園内でも、普段

訪れる生徒が多いですし」

「そりゃ見てみたい。今度行ってもいい？ ……って引退したんだよな」

「ごめんごめん、と言おうとしたら、うなずかれた。あれっ？」

「来年は進学しているので、高等部の古い研究部になりますが、それでもよければ」

「高等部？ ……ということは中高一貫なの」

「西花乃宮学園です。幼稚園から大学まで続いているので」

「チョーお嬢様学校じゃねーか！ そりゃや田所んち金持ちだったな。なんでアイツは中学から公立に通っているのか。またひとつナゾが増えちゃった。

話しているうち、だんだん緊張が解けてきた。もしかして態度が変わった俺に気を遣ってくれたのだろうか。だとしたら情けなくない俺？ 普通逆だろうよ。

「どうしました？」

「いや……。これからどうしよっかなりって。アイツら帰ってくるまで」

俺は時計を見た。ほんとうに罰ゲームを実行しているのなら、あと三十分はかかるはず。

「でしたら占いはどうですか。とても簡単なものです」

「と言ってトランプを切り出した。まだウンともスンとも答えていないのだが……ここは空気を読んで従っておこう。

「……赤井様？ 気を遣って頂かずとも結構ですよ。嫌ならちゃんと仰って下さいね」

淡々と言われた。うお、俺ってそんな顔に出るタイプだったのか？ ……気をつけよう。俺は苦笑して頭をかく。

「ごめん。やって欲しいよ。占いそのものというか、キミの占いに興味があるから」
「……そうですか」

そう言っただけで彼女は、わずかにうつむきながら、カードを切る手を速めて、やがて止めた。それから扇状おうちょうじょうに広げ、数字が見えないよう俺に差し出した。

「ここからいちばん引きたくないものを選んで下さい」

引きたくない？ そうだな……俺は少し考え、田所がもつとも引きそうな所を、指差した。

「真ん中のこれですね」

「うん」

うなずくと、彼女はそれを抜き取り、俺にだけ表が見えるようにした。ダイヤのクイーンだ。

「その数字について。直感で思い浮かんだことを教えて下さい。考えなくて」

「……『あれ。俺クイーン好きなのに。なんでジャックじゃねえの？ あの手ヨビビゲ野郎のほうがよくぼどもカツクぜ。YO！』……かな」

すると詠羅ちゃんは目をパチパチさせて、差し出したカードを持つ手をゆっくりおろした。

それからなにか真剣な顔でうつむいている。俺は不安になって、恐る恐る話しかけた。

「あ……あの。なにか悪い結果、出たんスか？」

「え？ いやあの……」

彼女はしどろもどろになり、こわばった顔をする。……ちょっとマジ気になるんですけど。待つこと二分。彼女はおおきなため息をつくと、ようやく俺へ向き直り、しずかに答えた。

「すみません……。前例のないお答えでしたから、どうしたものかと考え込んでしまいました」
「……普通どういう感じに答えるの？」

「まず、今赤井様が仰ったように、私に対して数字を申告することはありません。別にルールがあるわけではないのですが、私に見えないよう行っていますから、皆さんそういうものだとお思いになります」

俺は苦笑する。言われてみれば……いやでも考えちゃイカン、つて言われたからなあ。

「……それともうひとつ。あなたのように、愉快なお答えを出された方は、おられません。実は必死に笑いを堪こらえておりました。……しかしこうして説明するうち、再び笑いの波が押し寄せて参りました。……失礼ですが……笑っても……いい……で……すか？」

と、ものすごく顔をプルプルさせており、禁断症状が出始めたようになっていたので、俺が慌てて真顔で、

「すまん笑って！ とめどなく笑って！」

と言いつつ放つたら、爆発した。

「ぷ~~~~~~~~っはっはっはっはっはっはっ!! あははははははははははは!!」

腹を抱えて畳の上を転がりまわる。ロングスカートだからいいものの、ミニだったら丸見えですよ、というくらいに暴れっぷり。や、やっぱり田所の妹というのは正しいのだなあ……。でもこういう笑いは普通なのね。要するに無防備レベルまで達するかどうかってことか。そうしてひとしきり笑い転げたあと、涙を拭き拭き居住まいを直し、彼女はもとの落ち着きを取り戻した。

「すみません。取り乱してしまつて。もう大丈夫です」

「ほんとに?」

「はご」

俺は散らばったカードからハートのジャックを拾い上げ、彼女に見せた。

「? なんですか?」

きよんとする詠羅ちゃんに、次の瞬間、すばやくクラブのジャックを横に並べ、

「——生き別れの弟、ブラック・ジャック!」

と言つたら、また爆笑した。ふ……勝つた。

「ところであの占いの結果は、どうなるの。……測定不能?」

ひと段落して、俺は尋ねた。詠羅ちゃんはまだ少し、俺の顔を見ると笑いがこみ上げてくるようで、それをなんとか抑えるため、おおきな咳払いせき払いをしてから、言った。

「……いちおうご説明しますと、『いちばん引きたくないもの』とは、実は心の奥にしまつてある願望を示しています。だいたいの方がカードを一枚引かれますが、複数の方もいらつしゃいます。カードそれぞれが表す意味は、ジョーカーは含まず1から順に『希望』『信頼』『背信』『協力』『自由』『夢』『和解』『転換』『成熟』『奇抜』『安心』『破壊』となります。それにハートの『愛』、クラブの『情』、スペードの『真』、ダイヤの『命』を併せて判断します」

「ならダイヤのクイーンを指した俺は……」

「『命』と『安心』ですから、無病息災、人との衝突もなく心穏やかに生きてゆきたい、というのが奥底の望み、ということになりますね」

それはめっちゃめっちゃ当たってるよ。す、すげえ……。

「次に、カードについてのお答えですが、それはご自身の中に眠っている願望を、知らされた時の反応です。多いのが『へー、そうなんだ』『違うな』『え、分らない』、つまり肯定と否定と戸惑いとまど。なので赤井様の場合、要素だけ見て鑑かんがみるに、『自分は奇抜……当たり前でない生き方を望んでいるはずなのに、おかしいな』……となるかもしれませぬ」

うーん……。それも当たっているかもしれぬ。

詠羅ちゃんは一息つくつと、俺の目を見据えて言った。

「そして最後に、これがいちばん大事なところですが、引き方です」

「え……俺引いてたくない？」

「赤井様のように、カードを示すだけの方はいらつしやいます。その場合は示し方ですね」

詠羅ちゃんは俺が指差した様子を再現する。右手の人差し指をくるくるまわしたあと、すばやく前に出す……というやり方。

「これは『真ん中を行く人』の示し方です」

「真ん中？ つて……なんの」

「人生の。逃げず恐れず突き進む、とても勇敢な人間に表れるものです」

「ええ……。そうかなあ。俺そんな立派な人間じゃないんだけど……」

俺は照れと困惑のまじった、よく分からない顔をした。すると彼女は、

「いいことばかりではありません。とうぜん障害や困難に行き当たりやすく、その回避も資質性格により難しくなります。平穩無事に生きられる可能性は低いです。だからこそ、平穩を望んでおられるのかもしれませんがね」

ガビン……。それ、チョー困るんですけど。

「ちなみに兄は『全方位に歩む人』で、赤井様と真逆でした」

……なんかそれすげーよく分かるわ。

俺は感心の息をついたあと、置かれたカードを拾い集め、その感触を確かめるよう、ゆつくりと切り始める。

「思ってたんだけど、これけっこういいトランプだよな。値段が高いつて意味じゃなく、

すごく中身が詰まってる」

「えっ……」

「『もの』じゃなくて『いきもの』って感じ？ そういう体温を感じる」

詠羅ちゃんは驚いた顔を見せ、それから目を半眼にし、ニヤツ……とした。……あ、あれ？ えーっと。あ、そうか。これは喜んでるんだった……よな。

戸惑う様子に気づいていないのか、『ニヤツ』を六連発くらいして、俺を固まらせたあと、彼女はツバが飛んでくるようないきおいでまくし立てた。

「これはカチューシャ同様祖母から譲り受けたとても価値あるものなんですエイミは持っていません私だけのものとして占い自体も祖母から教えてもらったものを私なりの研究考察を付加して創り上げてきたものですこれは私の誇りいえ人生そのものと言っても過言ではありませんがそんな非科学的なものと言つて罵る人に会つとすごく悲しくて一晩中泣いたこともありますなので赤井様のような理解と知性と思いやりの深い方に会えることはとても嬉しく感激の極みですよろしければこれからも末永くお付き合いさせて頂きたいますご迷惑でなければっ!!」

「ちよつとちよつとやめてくれっ!! そ〜ゆ〜のは悪いことをした人がやるものなの!!
ね? キミなにかした!? ん? なんにも悪クナ〜イ。YO!! キョウハイイテン〜キ。HA!!
ミ〜ンナハッピー!! YOU!! イエ〜〜〜イツ!!」
「——プフッ!!」

彼女は再び爆笑し始めた。嗚呼、俺のせいで彼女の酸素摂取量が少なくなつてゆく……。



「たっだいま〜。は〜疲れた疲れた!」

「おれのほうが疲れたわ! たたくキサマの変態っぷりときたらノーベル賞ものだな」
なにやらギヤイギヤイ言い合いつつ、ふたりが帰ってきた。

「お〜お疲れ。つてかマジでやつてきたの?」

尋ねると、コタツへもぐりこみつ山城は、

「べつに腕立て腹筋スクワット百回ずつくらい、大したことねえよ。バイトで鍛えてるんだから。それよもだ」

そう、ブスとした顔で、またもや人の目気にせず着替えを始めた家主を見やる。

「コイツなにしたと思う? おれが学校の校庭で、腕立てやら腹筋やらやつてる時にさあ、

『キヤーツー』つて悲鳴がしたから顔上げたんだよ。そしたら田所が涼しい顔で立ってるだけなんだけど、またおれが始めたら『キヤーツー!』つて陸上部の女子とか野球部のマネとか……。あんまり続くから『どうしたの?』つて聞いたわけ。そしたら『あなたの動きに合わせて彼が腰を振つてたよ』……つて」

うわああああ……。その現場いちおう友人としては遭遇したくね〜〜〜つ!

「『すっごいシンクロ率だったよ』とか『やっぱりホンモノは違うよね』とか……なんか心底気持ち悪い、みたいなヤツと興奮してるヤツと面白がつてるヤツらがギヤイギヤイ喚いてよ〜。『セメとウケは固定されてるの?』とか『グラウンドを汚さないで変態!』とか……。とにかく必死で弁解してから阿呆を追かけたものすこいスピードで逃げ去りやがった。おれあんな足速いヤツ、見たことねえよ。陸上部の顧問が『彼はとてもいいものを持つてるな!』とか絶賛してたけどどうするせー知るか!」

今でも怒りが収まらない、というふうには拳を握り締める山城へ、上下カエル模様のパジャマに着替えたくだんの変態家主が肩を叩きつつ、隣に座る。

「も〜山城は。さつきから言ってるでしょ? オレは買い物へ行くために走つたの。お前が陸上部員たちに囲まれて時間かかりそうだったから、先に行つておこうと思つてさ」

「ぜったいそうそ! 間違いないくうそ! お前はあれか、買い物行くのにメト○ン星人みたいに走るのか、あ〜ん?」

「知らないなあそんな古い特撮番組。まあまあそれはともかくさ。たつぷりピーマン買ってきたから、詠羅。よろしくねっ」

と、コタツの上に置かれた袋には、ピーマン、ピーマン、ピーマン……って、ピーマンしかねーじゃねーか！ オ、ゲゲゲ……。

「オイコラ他の食材はどうした！」

「早とちりはイカーンと言ったでしょ？ ちゃんとあるよん」

そう示したもう一袋には、確かに肉やらたまねぎやらにんじんやら入っていたが……どう見てもピーマンの天下になつとるがな。こんなもん、断じて俺は食わんぞ！

助けを求めるよう詠羅ちゃんを見る。さつき仲よくなったところだし、カンのいい子だから心底嫌がっているこの気持ちを汲み取ってくれるに違いない……と期待したのだが、しばらくマウンテン・オブ・ピーマンを凝視したあと、彼女は俺のほうへ向き直り、ニッコリ……それはもう見事なまでの天使スマイルだった。え~~~~~~~~っ！

「赤井様。兄もそうですし、山城様もキチンとご自身の責務を果たされました。ここで超ぶつちぎりダントツ最下位であるあなたがそうされないのでは、まったく筋が通りませんそれに申したようアレルギーならばともかく、単純な好き嫌いに基づき高校二年生にもなられてピーマン嫌いというのは、主観ではありますがいささか恥ずかしいのではと存じます。これもなにかの縁。きょう私は精一杯、あなたのため腕を振るいたいと思います。……あなた

の嫌がる顔も見てみたいですし」

……なんか俺のためみたいなこと言ってるけど、キミその笑い方と最後のつぶやきで全部ばれてるからっ！

その後、俺がますますピーマン嫌いになったのは言うまでもない。げ……ゲフウ……ッ。



なんののかのと騒いだせいで、時の流れがすごく早い。気づけばもう六時だった。

「晩御飯も一緒に食べたいところですが、父から帰るように言われていますので」

「うん。父さんによろしく！ じゃあねえ……ずいぶん詠羅と仲よしになったみたいだから、赤井、送ってあげてね〜」

「え……ああ」

「『え……ああ』だ〜って！ くすくすくす」

「ゆ〜っくりでいいからな。なんなら帰ってこなくてもいい。く〜く〜」

「……そんなに掘り合いたいのかお前ら。なら帰ってくるまい」

それで三人ギヤースカブースカ言い合いを始め、しばらくのち、「赤井様……帰りますよ」

と妹氏にきつく睨まれて、ようやく俺は変態家をあとにした。

もう星が出ていた。月も見える。ヤツらのアパート周りには人通りが少なく、しばらくしかな住宅街をてくてくと歩いた。はく息も白くて、雪こそ舞わないが見事な夜の冬景色。仲よくなったといつても、やはり少し緊張する。

なのでそれをまぎらすよう、つぶやいた。

「ほんとうにしずかだな、この辺り……。田所の家行くの、夜はやめたほうがいいね」

「……そうですね。ちよっと怖いです」

と、俺のほうに寄った。肩に触れてはないが、横風よこかぜが遮さかんられるほどの距離。知らず鼓動こどうを速めてゆく。

「あ……。あのさ」

「は？」

「受験はないんだよね。一貫ということはない」

「うちの場合、進学試験ということになりますが、あまりに成績の悪い生徒以外は、ありません。幸い私は進学できるようです」

「年末はどうするの。家族で過ごすとか」

「祖母が生きていた頃は、親戚しんせきが集まって過ごすのが恒例でしたが、それはもう法事の際に、

という感じになりました。なので特に予定はありません」

「俺は毎年家でダラダラしてたら、田所が来るんだよね。たぶん今年もそうだろうけど」

「ではお会いすることも、あるかもしれませんね」

「だとしたら嬉しいなあ」

「……そうですね」

そこでお互い、無言。詠羅ちゃんはうつむいている。

あ……。恥ずかしいこと言っちゃまった……。いや、実際会えたら嬉しいんだけど、なんか口説いてるみたいじゃん。クリスマスという単語を持ち出さず、世間話せけんわをしようと思ったのだが……。年末の話題を出した時点で、同じだよなあ。

苦笑するため息をつく。クリスマスか……。そういえばガッコでもそれを見越してなのかどうなのか、最近カッパルになったヤツらがいるな。俺のクラスに一組、隣にも一組。内心ひんしん他人事ひとことだったけど、俺も今この現状だけ見れば、似たような行動をとっていると思われるも否定できない。でも俺……。クリスマスはな……。

しばらく行くと、まだ四日だというのに、イルミネーションで飾り立てている家があった。詠羅ちゃんは顔を上げ、子供のようそれを見つめていたが、俺は目をそらす。クリスマスは『アレがあった日』で、昔から俺にとっちゃ楽しくないことの象徴だからだ。

「きれいでしたね」

「……そうだな」

詠羅ちゃんは楽しそうだった。俺はそれを壊さぬよう笑顔で応じるが、すぐに様子を悟った彼女は、俺の目をのぞき込む。

「あの……私なにか失礼なことを」

「えっ？ 違う違う。ぜんぜん違う」

俺は慌ててかぶりを振り、ごまかすような苦笑をまじえ、とっさに言った。

「そ、そういえば恵衣ちゃん戻ってこなかったね！ 一緒にトランプしてみたかったなあ。ひよっとして、彼女も詠羅ちゃんみたく強いのか？」

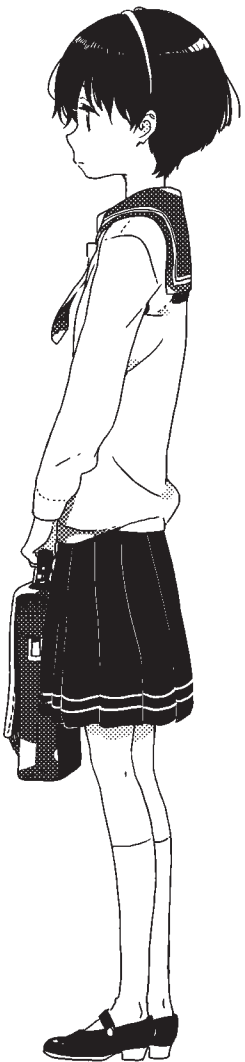
「……………知りません」

と、その瞬間、彼女はとっぜん不機嫌になり、歩き出した。……あれ？ 俺なんかおかしなこと言った——って馬鹿か！ そうだ。仲悪いんだったよ……。

俺は頭をかきながら、ゆつくりと前に行く詠羅ちゃんを早足で追いかけた。取り繕うようたわいない話を幾らか続け、なんとか彼女の機嫌は直ったが、家まで送ることはやっぱり断られ、けっきょく……駅前で別れた。



第3章 恋の自転車はノーブレーキがお好き



色々あってあまり眠れず、体の疲れも抜けぬまま、月曜日。毎朝恒例、俺は母の一喝で飛び起きて、ストロブ前でのろろ着替えて飯を食い、着いブルゾンをひっかけると家を出た。白い息をあくびではいては、国道沿いから住宅街へ、のんびり愛車を走らせる。やがて「大仁志卓立菜ノ川高校」と刻まれた門をくぐった。

校舎へ流れる学ラン男子、ブレザー女子らをスイスイ抜けて、知人に挨拶したりされたりしながら、ようやく自転車置き場に着的たところで、俺はスコーンと頭を叩かれた。

「おーっすアカイ！ 相も変わらず寝ぐせバツチリだな！」

その腹に響く大声に、チャリの鍵を抜き取つため息ひとつ、俺は顔をしかめて振り返る。果たして空河香里が寒さに負けず元気いっぱい、朝日を背負い仁王立ちしていた。そして、いつも通りの白い歯を見せながら破顔一笑、黒髪の、きのこのようなショートボブと胸元の赤リボン、白のミニスカートを冷風で揺らしていた。

ヤツは女子らしからぬ粗雑さで再び俺の頭を叩く。

「なーにその顔？ オマエは二日酔いした時の、うちのとーちゃんかつーの。ハハ！」

「……頭を叩くなデカイ声出・す・な。あとこっち寄れ」

俺は狭い道に仁王立ちの級友を引き寄せて、校舎へ向かわんとする生徒たちの通路を作る。その後、鞆をひっかけ、ペラペラ話すヤツと並んで歩き出した。

「なあなあ休みなにしてたー？ あつしきのう友達んち行つたらさー、たまたまそのおにー



さんがいたんだけど……それがちよーイケメンでビビったよ！」

「へー。どんくらい？」

「んー。山城が三十アカイ、くらいだから二十五アカイ、くらいかな」

……その単位初耳なんですけど。とうとうと説明されたら傷つくからツツコミはやめとこう。

「あ、ちなみにこの単位はさ、オマエの顔面レベルをイチとして、他の人が何倍あるか、ってことね。考えたの田所だから。まあ広めたのはあつしだけでも！」

「てめーぶつとばすぞコラァ!! あちこちで『この俳優チョーカッコイイ! マジ四十アカイくらいあるよね?』とか女子が会話し始めたら訴えるからなっ!!」

「あらら、このよゆうのない反応……。さっすが生まれ落ちてから学ラン着るまで彼女いない人は違うね! だからあつしが言ってるっしょ? 女の子にモテたかつたらさあ、おペンキヨしなきや。ファッション誌とか読んだことある? だいたいその寝ぐせつたら……」

と、歩みは止めず失礼な物言いはさらにやめず、俺にまくし立てる空河。しかしいつものことなので無視していると、ヤツは面白くなさそうにかぶりを振った。

「ほら、アドバイスしたって聞かないんだもん。オマエそんなんじや、この先ずつとひとりだよ? まあそもそもあつしにさあ、彼氏いないんだから、先にできたら生気だけでも!」
 「くだんのイケメンおにーさんでも狙ったら? つーか誰でもいいから、お前は男を作った

ほうがいい。絶対」

「はあ? なんださ」

言動に色気のかけらもないからな……とはさすがに言えず、「女を磨くためにだよ」と婉曲表現にとどめた。そもそも見た目はけっこう可愛いものにもつたいないんだよコイツは。

空河は不機嫌な顔で、ブレザーのポケットに手を突っ込み、

「ひとり身がえらそーに……。てかあつしは、顔で男は選ばないの! ほら、全体からじみ出る雰囲気っていうか、その……一見頼りなさげで頼りがいのあるヤツがいいんだよ!」

「そうか。……まあなんでもいいから、そうしたほうがいいと思うってこと。いちおう二年間同じクラスだった俺からの助言な」

「だったってなんだよ……。まだ二学期終わってないし。三学期もあるだろ。それに三年でも一緒だつて! うん。運命ってヤツだよ。……大学も一緒だといいなあ」

「俺は大学行かないと思うぞ」

「へっ。素直じゃないヤツ!」

空河と話しながら歩いていると、いつもの居心地よい日常に戻ったようで、少し気分が上向いた。やつぱり持つべきものはなんとやら、だな。

そうして教室へたどり着き、戸を引いてにこやかにくぐると、入り口付近のストープに

手をかざす、柿色アロハシャツに紫短パンの男がいて、俺は頭を押さえた。

「あつろはー！ 赤インデペンデンス・デイ！」

「……お前は暑いのか寒いのか、どっちなんだよ……」

学舎にあるまじき出で立ちと、くだらんシヤレを放つ田所に、いよいよ頭を痛めて俺は言った。するとヤツはにこやかに、

「体は寒いが心は熱い……という感じを表現してみたよ」

と、のたまう。とうぜんのことながら、田所の半径一メートル以内には誰も近づいていない。暖を取りたい人もいるだろうに……。いつものこととはいえ、自分の友人がクラスメイトに迷惑をかけているのは忍びない。

「——コラ変態！ オマエは四組だろ！ こ・こ・は・一組!! ヒマだったら山城のクラスに行けっつーの！ 毎回毎回うちの熱を奪うんじゃないよ！ いろんな意味で！」

俺と同じ気持ちだったろう空河が、田所の頭をパッコーンと叩き、教室の外に蹴り出して戸を閉めた。入ってこないよう体で押さえるという徹底ぶり。まあ週に何度も目にする光景ではあるが。

すると入り口の横、空気の入れ換えをするためのちいさな引き戸がガラリと開き、田所が顔を出した。ちなみにそこは、廊下側の席の足もとに当たる。果たして一限目の予習をしていた吹奏楽部の山下さん(○十)が悲鳴を上げた。

「——ヒイイイイッ!!」

「あ、落ち着いて？ パンツは見えないから。ヒザの裏だけ。ちよいとごめんよ」

田所は、恐怖で顔を引きつらせる山下氏の椅子の下をよいーン……とくぐりぬけ、教室へIN。それでクラス唯一のちよい悪系である砂原(○)まで、とうとう寒い中無言でベランダへ逃げた。あの……窓越しに俺へガンを飛ばすのやめてくれないかな。

「すぐ終わるからさ。めくじら立てないでよん」

睨みつける空河へウインクを飛ばし、体のほこりをていねいに払うと、田所は尻のポケットからピンクの封筒を一通、取り出した。

「あのさあ赤井。放課後、お使い頼まれてくんない？」

と、それを俺の手に握らせる。一見なんの変哲もない、可愛らしい封筒ではあるが……。

「これを誰かに渡すのか？」

「うん。恵衣美にね」

エイミ？ ……って恵衣美ちゃんか。けつきよくきのうは、田所のとこ戻っても、彼女は顔出さなかったから、よく知らんんだけど。まあどうせ山城はバイトで夕方はヒマだし、届けるくらいなら……。

「いいけど。なんで俺が？」

「も〜。分かってるくせに……」

と、気色の悪い声を出し、指で俺の胸を突く。……まさかコイツ、「アタックけん」のことを言ってるのか。

「とつぜんなんの用事もないのに、会いに行くのは腰が引けると思っただけからさ。察しなよお」

「あのなあ、お前……」

「ねえねえ……エイミって、誰?」

俺の言葉を遮って、空河が間に入る。めずらしく真顔だった。

「妹だよーん。とつても美人で自慢なのさっ」

「オマエ妹いたんだ。ふーん。……で、それはアカイト、どういう関係?」

「うーん。どういう関係になるかは、赤井次第かな?」

と、とんでもないパスをこちらに放ってきた。——オイコラ!

田所の言葉を受けて、空河はこちらを向いた。俺はやむなく苦笑する。が、ヤツは少しの間、無言無表情で俺を見たあと、そのまましずかに自分の席へ戻っていった。

「? なんだアイツ……」

「んー。まあ赤井は気にしなくていいよ」

田所は糸目を片ほうだけ、ほんの少し開き、俺を見る。……なんだよその顔は。

「なんでも巡り合わせが大事なんだよねー。赤井も自分の星を見失わないように!

あでゅー」

そう言い残して、ヤツは再び山下さんをビビらせつつ、下の引き戸から出て行った。



放課後、けつきよく俺は田所に運賃と地図をもらい、けつこうな数の駅をまたいで、恵衣美ちゃんの学校までやつてきた……。のだが。

——大仁志県立豊野岬高校——

と、刻まれた門から、色とりどりのコートの下、ダークグリーンのパレザーをまとった男女が時折出てくる。ネクタイはオレンジだったり、赤だったり、レモン色だったり……。つておい。豊野岬って公立じゃあ、うちの県ナンバーワン進学校だぞ? 俺のとこより偏差値十四、五は上なんだけど。恵衣美ちゃんこの生徒なのかよ……。

気後れしつつ、門の陰に寄り腕時計を見る。……四時前か。田所の話だと、四時過ぎくらいに出てくるらしいけど……。つーか俺のことなんか、覚えてるのかな。ちよい挨拶しただけで別れたしなあ。

待つこと五分。ブルゾンから手を出し、ハーハーしていたところ、数名の男に囲まれつつ、自転車を押し押し校門を出てくる、非常に華のある黒髪ロング少女が目映った。ひとり

だけコートも着ずにブレザーを開けてシャツを出し、オレンジネクタイを揺らして歩くミニスカートの……恵衣美ちゃんだ。

俺は思わず、

「あ」

と、声を漏らす。すると向こうも気づき、俺のほうを向いて、

「……あー」

と指差し、さけんだから、何度もうなずきつつ、自転車のハンドルをこちらへ切り、目前までやってきた。

「コウさんじゃーん。どしたんですかー？」

恵衣美ちゃんにはこやかに、手をグーパーしながら声をかける。反して周りの男は、俺のほうをジロジロジロ、恵衣美ちゃんとは対照的に、決して好意的でない視線を飛ばしてきた。……なんか俺の本能がヤバいと伝えてくるので、さっさと済ますことにする。

「あー。あのさ。ハイコレ」

「ん？ あらかわいー。ラブレターですか？」

そんな彼女の言葉に、ひとりの男は目を見開いて、別の男はポケットから手を出し、また別の男は赤ネクタイをゆるめツバをはいたので、俺は必死で全身を使いアツピールする。

「ち・が・い・ま・すっ！ 田所からのことづけだって!! お兄ちゃんね？ 兄ちゃん!!」

「なーんだつまんない。「ごめんさい」って言いたかったのになー」

あの……告白してないのに振られるってのは、予想外の仕打ちなんですけども。

なんとも言えぬ気持ちで、顔をゆがめている間、彼女は封を切って手紙を開く。が、すぐ目を丸くしてこちらを見、

「――ブフッ！」

と噴き出した。そうしてケラケラケラ。……な、なにが？ なぜ俺を見て笑うー!?

恵衣美ちゃんは笑いを漏らしたまま、手紙をポケットにしまい、男たちに「じゃあバイトだから！ ばつははーい」と手を振って、彼らを追い立てた。皆名残惜しそうに彼女をチラチラ振り返りつつも、嫌われたくないのか、背を向け帰ってゆく。……なんか申し訳ないっす

「……さてと。じゃあコウさん」

と、俺の微妙な気分をよそに、彼女は白い息をまじえ、ニカッと笑う。

「後ろ、乗って下さい」

俺は彼女が示すほうを見た。そこには藤カゴとうかごにオレンジのベル、しゃれたデザインのと、青い自転車……の荷台。思わず苦笑して返す。

「なんで……つてか、ふたり乗りは、不味まずいんじゃないかなあ……」

「だーいじよぶ大丈夫！ あ、時間ヤバめー。ちゃっちゃと乗って下さいー」

そう、腕をつかんで引き寄せるので、やむなくまたがった。果たして周りがチラチラ見て

くるが、それを恥ずかしいと思う間もなく、自転車は動き出した。

「……むむっ。けっこう……重いけど……すぐ坂道だから……大丈夫！」

「坂？」

俺は荷台の後ろを逆手でつかみ、つぶやく。そうして校門を過ぎ、塀沿いに直進すること数十秒、角を曲がった所で、とてつもなく長くだり坂が、街に向かって延びているのが目に入る。……ちよっと待て。駅からテクテク歩いてきた時は気づかなかったけど、この学校って、こんな高い所にあったの？

「行きますすよ。しっかりと待つかまって下さいね」

「え？ えっ？」

俺が目をパチクリさせた瞬間、青い自転車はボールが転がり出すよう動き始め、やがてものすごいスピードをまとう弾丸となった。

「ちよ……ちよっと待ぶふおおおおおおお~~~~~」

「ひよ——っ！」

俺の悲鳴をBGMとして、歩道を一気に急降下。けっこう広いとはいえ、とうぜん人も歩いているから気が気でない！ しかも減速の体感がないので、ブレーキなしでくっただっていいことは明らかだったのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!

「ブレッ！ ブレーキ！ 減速！ アンゼンッ！」



「大丈夫だいじょーぶ！ 事故つたことないから！」

「きょうが一回目になったらどうすんだよ~~~~~っ!!」

「その時は一緒に、仲よくニューインしましょ！」

めちやくちなことを言い、彼女はノーブレーキでハンドルを右に切った。そばを高速で後ろに過ぎゆく、乳母車うぼくまとオネーサンの安全を確認しつつ、ようやく坂が終わったことに安堵あんどの息をついたのもつかの間、再びくだり坂が目前に迫っていた。勘弁かべんしてくりゃ~~~~っ!

「はあ……はあ……」

「とーちゃーく。お疲れ様でした！」

俺は荷台から崩れ落ちるよう降り、アスファルトへ四つん這いになる。彼女は自転車を停めて鍵を抜き取ると、猫のキーホルダーを指でクルクルまわしながら言った。

「じゃーん。ココがワタシのバイト先でっす。中で待ってて下さい。すぐ出てきますんで」
見上げると、そこには、かのバーガーショップが建っていた。俺が答える前に、彼女は店に消えたので、かきまわされた胃を押さえつつ、俺は自動ドアへ向かっのろのろと歩いた。

店内は時間帯もあって、学校帰りの中高生が多く、席は埋まっていた。五分くらいだろうか。ほんやり壁際かべぎわに突っ立っていると、奥からカウンターへ、店員姿の恵衣美ちゃんが歩い

てきた。長く美しい黒髪は、後ろでひとくりにされている。

彼女は隣のバイト仲間らしき娘へ、笑顔で話しかけてから、俺に手を振る。なので歩いて行こうとしたら、各席に陣取っていた中高生の男たちが、いっせいに恵衣美ちゃんのもとへ駆け寄ったので阻はままれた。

「チーズバーガー下さい！」

「かしこまりましたー。ドリンクはどうなさいますか？」

「ジンジャーエールのLで！ あ、恵衣美サン、ところで『アイアン・チートマン』見ました？」

先頭の中学生らしき男の子以下、その次も、そのまた次も、幾ら食べ盛りとはいえ、あふれんばかりの注文をし、その上世間話せけんも挟はさむので、選ぶ時間が長い。隣のレジレジっ娘は空気を読んで奥に引っ込んだし、どう見ても皆、恵衣美ちゃん目当てなのは明らかだった。看板娘ってこういう娘のことを言うんだろうな。

けつきよく、俺の番がまわってきたのは十分後で、じっと彼女を見やる男たちの視線を気にしつつ、カウンターへ。恵衣美ちゃんは変わらぬ笑みで迎えてくれた。

「いらっしやいませー！ ご注文はどうなさいますか？」

正直、腹は減っていないどころか、さっきのジェットコースターもどきであまり食いたくないのだが……仕方ない。

「……じゃあチーズバーガー。持ち帰りです」

「ビッグバーガーがピッタリですよ。育ち盛りのコウさん的には。——あ、ご一緒にポテトとサラダもつけますね。あとドリンクはコーラ……っと。それぞれして！」

すべて決定事項なのね……。金足りるかな。

「デザートにアップルパイもみつっ、おつけしますね。おうちの人も食べますもんね！」

「いや、いや。もういいよ。俺はこれで十分。兄弟いないし。うち母親だけだから」

「……そうですか。じゃあお母さんにひとつで！——以上ですね。お代は結構です」

「えっ？」

「お兄ちゃんのおゴリですから。その代わり、また来て下さいね」

と、ニコリ。まさしく天に輝く、太陽のような笑みだった。か……可愛すぎる。これはヤバい。俺の心もだけど……後ろの男連中の視線が。……恵衣美ちゃんの彼氏になる男は大変だな。

「あ、それとコウさん。きょうヒマですか？」

「え。ああ、うん」

恵衣美ちゃんは体を寄せ、甘い香りを漂わせてささやいた。

「よかつたら、晩ゴハン。」一緒に食べませんか？　ホラ、きょうは遊び損ねたし」

「いいの？　……って何時頃かな」

「きょうはシフトの関係で、三十分早く入ったんで、八時半には上がりますから、その辺りで！」

「分かった。じゃあそれまで時間つぶしてるよ」

……と、格好よく言つて外へ出たものの、俺の門限は八時であった。……仕方ない。きのうのきょうでアレなんだが、また田所と遊んで遅くなることにしよう。

ため息をつき、携帯を取り出すと、母さんへ。もう仕事終わったかな……あ、出てしまつた。

「あー俺。今大丈夫？　あのさー。きよ」

《帰りに洗剤買ってきて。食器洗いの。あと公。あんた田所君にあんまり迷惑かけちゃ駄目よ！》

「……えっ？　なに？」

《言おうと思って忘れてたけど、きのうも田所君に泣いて頼んだそうじゃない。授業のノート取り忘れたから写させてくれって。色々勉強のコツとか教えてもらうのもいいけど、彼、受験勉強のためにひとり暮らし始めたんだから、あんたが入り浸つてちゃ、意味ないでしょ！》

……あんの糸目野郎。けっこうなご説明して下さいるじゃねえかコラア!!

《さつきもわざわざ、きょうもあんたが遅くなるって電話くれたのよ。田所君に申し訳ない

から許すけど、今度からは、まずあんたがきちんと電話入れて説明なさい。分かった?」

「……はい」

《田所君も山城君も、あんたによくしてくれているいい友達なんだから。大事にしなさい。人の縁は……いつ切れるとも分らないんだから》

「……ああ。分かつてるよ。んじゃ」



それから数時間。ヒトカラ、立ち読みなどでヒマをつぶし——。日が落ちて、店の外灯がまぶしく輝き出した頃、俺はパーガーショップに戻ってきた。するとちょうど、恵衣美ちゃんが手を振り振り、店から現れ、白い息を伴いこちらへ近づいてくる。

「お待た〜。どうもドウモ！ じゃつ、行きましようか！」

「あれ？ 自転車はいいの」

「きようは置いて帰ります。歩きながら話もしたいし〜。ちょっとデートみたいでもんね」

そう言い、ニカッ……と笑う彼女。俺は瞬いて照れ笑いするしかない。果たして恵衣美ちゃんはケラケラケラ。あく、完全に手玉だよ俺。山城なら、うまく返すんだろうなあ。

「ところでゴハンですけど、店じゃなくて、ソトで食べませんか？」

「公園とか？ ……いいけど。寒くないの」

彼女はコートも着ていない上、下の制服はミニスカートという出で立ちである。

「ぜんぜん。ワタシソーユーのツヨインで。……知ってます？ ソトで食べるカップメンって、ケッコー美味しいんですよ」

彼女の勧めに従い、俺たちはコンビニでカップ麺を購入して、注いだお湯をこぼさぬよう、そろりそろり歩きつつ、世間話をしながら、恵衣美ちゃんの誘導のもと、近くの公園へ。そこはちいさく、遊具の類はわずかで、グラウンドも狭かった。たぶん近所の主婦などが、買い物帰りに子供連れで訪れるような場所なんだろう。今はひとけもなく、しずかだった。

滑り台の横にある、ベンチに俺たちは腰掛け、同時に「頂きます」と言つて麺をすすった。

「……はふっ……ほいひー。わはひ、ひーふーほ、ふひはんへふほ」

「……シーフードが好きなのね。俺は普通のしか食わないなあ」

と言つて、ズルズル。寒さもあつて鼻や頬も赤く、白い湯気と息で辺りは埋め尽くされた。俺に負けじと、恵衣美ちゃんは実にうまそうに、麺をすすり上げている。

「ほーいへばコウふあん、ずるずる、パーガー、じゅる。ぜんぜん食べてないんですか？」

おおきさの変わらぬ紙袋を見、彼女が尋ねる。俺は苦笑してつぶやいた。

「いやあ……晩飯食うつていうからさ。今食べるよ」

そう、紙袋からポテトを取り出して、一本口に入れる。うむ。うまい。冷たいけど、ラーメンが熱いからちよいどいいや。

「……なんかおいしそー。 IPPON もらって OK、ですか？」

ああ、いいよ……と答える前に、口を開けていたので、俺はそこへ差し入れた。彼女は器用に口だけを使い、ぱくぱく中へ飲み込んでゆく。

「おいひー。ラーメンが熱いから、冷たくてもちよいどいいですネ」

と言ってニコニコとする。……あー、この子がモテるの、よく分かるわ。気取りもなにもないもんな。ただ、他意がなさすぎるのも……男には残酷だと思うが。

「……？ どうしたんですか？」

「いや……。 恵衣美ちゃん可愛いなと思って」

「えっ？」

「……あっ！」

と、慌てて口を押さえる俺を、果たして恵衣美ちゃんは訝しがった。

「……ちよっとお……。なんでそんな顔するんですか？ 褒め言葉でしょ今の」

「いや、いや、いや。そうなんだけど、思ったことをそのまま口に出すのはよくないというか、なんとというか……。 軽いつてか、いい加減なヤツと思われるじゃん!」

「……少なくとも、『重い男』には見えませんよコウさんって。 さいしょから」

と、半眼で俺を横見する。 うっ……はつきり言われてしまった。

俺がガックリうなだれる様子を見、恵衣美ちゃんはちいさく噴き出した。

「コウさんって面白いですねー。 ちよっと変わってるというか。 ヤマさんとは、ぜんぜんタイプが違いますよ」

ああ……山城と遊んだとか言ってたな。 そりゃーヤツはイケメンだしな。 さわやかで優しいし、シスコンじゃなけりや今頃何人の女と付き合ってるか。

恵衣美ちゃんは俺の心中を知ってか知らずか、またクスクス笑い、カップ麺を一口すると、横へ置いて言った。

「実はコウさんとおおししゃべり、してみたかったですよね。 あのお兄ちゃんの『オトモダチ』がどんなヒトか、知れたかったの」

と言い、俺が持ってきた封筒から手紙を出して見せる。 そこにはこう書かれてあった。

—— お客を連れてきたよっ！ BY 兄 ——

「……………あんの野郎」

俺が歯ざしりするとまた嬉しそうに笑った。

「ヤマさんはねー。 すっごくいいヒト。 お兄ちゃんにとつての、お兄ちゃんみたいなヒト

なんだなああって、思った。でもコウさんは……お兄ちゃんの恋人？ そんな感じかなあ」

「……そういうことは冗談でも言うのはやめようね？」

鳥肌が立ち、体を両手で包み込む。恵衣美ちゃんは「コウさんがお兄ちゃんと結婚したら、コウさんはワタシのお兄ちゃん？ お姉ちゃん？」と楽しそうに、おぞましいことを言ったので、いつそう体をこする羽目になった。

「あのねーキミ！ 俺は将来、可愛い女の子と結婚して、幸せに暮ら・す・の。田所君とはそーゆー面で縁もゆかりもございませぬ！」

「可愛い？ ジャーワタシにもさつき言ってたから、チェック入れてるんだ。どうしましょ」
「入れてねーよ！ 会ったばっかでしょーがキミと俺は！」

「あれ〜後悔するかもですよそんなコト言っちゃうと。ワタシ、けっこーモテるんですよ？」

俺がため息をつき、頭をかいていると、恵衣美ちゃんは変わらずケラケラ笑う。が、それから少し間を置いて、とっぜん真顔になると、彼女はレモン形の月がかかる空を見上げ、つぶやいた。

「でも結婚……ってコトバ。ワタシにはちよい、マジ問題なんですよね〜」

「……まあ男の俺と比べたら、そうかもな」
すると瞬いてちいさく笑い、かぶりを振った。あれ……違うのか。

俺がきょとんとする横で、彼女はぼんやり遠くを眺めたあと、白く細い腕を前へと伸ばし、こはく色のブレスレットを月に照らした。それはまるで白魚のはじく水滴が、水面できら輝くように美しく、俺の目を惹きつけた。

「……それって確か、おばあちゃんの形見……だったよね」

「ですよ。すっこい値打ちものなんです。高い、つてことじゃなく、ワタシにとつてはね」
冷たい風がさっと吹き抜け、細腕にまとうこはくの輪をちいさく揺らし、彼女の長く美しい黒髪をなびかせた。

「……ワタシんち、昔から両親、あんま家にいないんで、だからワタシ……と、……エイラも、すっこいおばあちゃん子で。今でも、思い出したら泣いちゃうようになりますね〜。でも泣いたらおばあちゃんに怒られるから。なよなよ後ろ向きだと怒るヒトで」

恵衣美ちゃんはブレスレットを包むようにし、続ける。

「ワタシの憧れで、目標なんです。女としての。でもおばあちゃんに近づくには、色々問題があつて……」

彼女はそこで言葉を切り、目を眺めた。……そうか。詠羅ちゃんもだけど、今でも、彼女にとって、亡くなったおばあちゃんは、すごくおおきな存在なんだな。……占いが得意で、後ろ向きだと怒る人、か。……まあ恵衣美ちゃんの口ぶりじゃ、相当イケてる人、だったのは間違いなさそうだ。

俺がぼんやり、そんなことを考えていると、しばらくのち、恵衣美ちゃんはこちらを横目で見、ニカッと笑った。

「コウさんって、今フリーですか？」

「……はあ。まあ」

と、情けなく答える。今もなにも……と言いかけたがやめた。

「じゃあお仲間ですね。ワタシもそうなんですよ！」

そう嬉しそうに言えるところが、キミと俺がお仲間じゃない証あかしになっていると思うのだが……。

「トモダチなら、いるんですけど。な〜んか、ムリなんですよね。たぶん」

「……彼氏になるとは違う、ってこと？」

「う〜ん。胸がきゅぴ〜ん、ってしないとかなんというか。……ムリ、なんだろうなって」

……いまいち要領を得ない話し方だな。つまり、恵衣美ちゃんをドキドキさせるほどの

男友達がないってことか。

俺はちいさく息をはき、まっすぐ恵衣美ちゃんを見つめ、真顔で言った。

「まあいいんじゃない？ あせ焦らなくても。そのうちきつと現れるよ。恵衣美ちゃんの心をかっさらっていつてくれる……素敵な白馬の王子様がさ」

「……すて……はく……オウジ？」



恵衣美ちゃんは目を見開き、俺の顔を凝視ぎょうししたあと、

「――ぶふっ!!」

と、盛大に噴き出し、笑い出した。

「……あ~~~~~~~~っははははははははは!! あははははは!! なに言ってるのこのウさん!? わははははは!!」

ベンチをバシバシ叩いて、涙を流す彼女。……え? えっ? えっ? なんて笑うの? 今俺、けっこーいいこと言ったっぽくね!?

恵衣美ちゃんは涙を拭き拭き、俺の肩をばしばし、仕事に失敗した同僚を慰めるよう、つぶやいた。

「はー……。王子さま、ですか。ステキな。フツッ。……いいですねソレ。がんばって下さい!!」

「いや……。なんで俺ががんばるの」

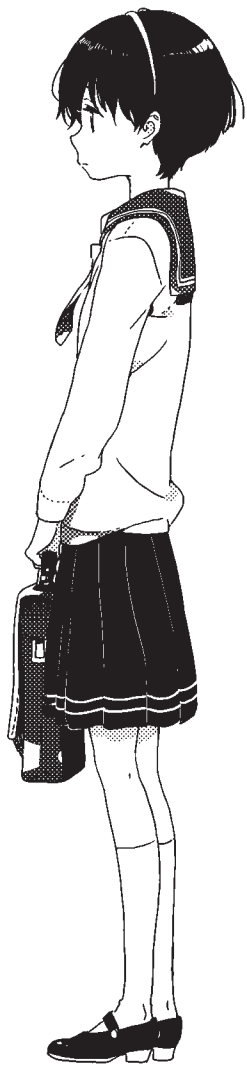
「コウさんを待ってる、オヒメさまがいるかもしれないじゃないですかっ。……ねっ?」

と、嬉しそうにウインクし、また肩を叩く。……駄目だ。この子には勝てん。見た目は違っても、やっぱり田所の妹だった……。

その後、しばらく無駄話をして、麵もポテトもサラダもふたりに平らげた。駅まで歩き、

別れる頃、「王子! テル番とメアド、交換しましよ!」とニヤニヤのたまう恵衣美氏に、苦笑しつつも従い、互いに新たなアドレスを増やしたあと、彼女は笑顔で改札へ駆けていった。

第4章〜恋の門番は怪力無双〜



「……で。その後。やりとりしてんのか？」

「……まあ。メールをちよくちよく。……てかお前だつて遊んだ時、交換したんだろ？」

「したけど。挨拶みたいなもんで、やりとりなんかしてねえよ？ やっぱお前、気に入られたんじゃない」

そんな山城の言葉に、俺は頭をかいて、壁にもたれる。ヤツはパックのウーロン茶をすったあと、再び愛妹弁当に舌つづみを打つ。

今週最後の昼休み。俺たちはいつものように、屋上へと続く階段の踊り場で、飯を食べていた。田所は学校の外へ買い出し中なので、とうぶんは平和である。

高い所に穿たれた、ちいさな採光窓から差す明かりにわずかな暖を求め、俺たちは少しの間を空けて、階段に座っていた。話題はいつものマンガやらテレビやらサッカーやら……とは少し違い、月曜にあった俺の出来事……つまり恵衣美ちゃんのことについてだ。今まで黙秘を貫いてきたが、山城はとつくにヤツから報告を受けていたらしく、今頃思い出したように飯中の話題として振ってきた。

俺はミートボールをハシでいじくりつつ、

「あの子は誰にでもあんな感じみたいだし……それに第一、このままじゃ田所の思惑通りだ」と言つて、ブルゾンから「アタックけん」を二枚取り出し、揺すつてみせる。

「アイツがなに考えてるとか、そんなことは常に分らんからどうでもいい。が、毎度乗せ

られるのはシヤクだからな」

「ま、だいたい同意するが……たまには乗つて楽しいことも、あるんじゃないか？」

山城はニヤリとし、俺と、手にある「けん」の間を、チラチラ視線移動する。それに顔をしかめると、ヤツはケラケラ楽しそうに笑つてから、見事な色味の卵焼きを頬張った。

「うめー。さすが映子。世界一の腕だぜ」

……話振つておいて。こりや完全に他人事モードだな。……さて。どうしたもんかなあ。

そう、再び頭をかいた時、誰かの足音が聞こえて「けん」をポケットにしまった。冷風を伴つて現れたのは……空河だった。

「おーっす山城！ きょうも妹の弁当によだれたらしまくりか？ 相変わらずシスコン全開だな！ はっはー！」

空河は、田所以上に無神経なことを言い、山城にニヤニヤ歩み寄る。いつぼう俺に対しては完全無視。……コイツもしつこいやっちゃな。きょう金曜だぜ？ 月曜からずっとこんな感じで怒ってるが……いつたいなにが気に入らないんだ。

ヤツは半眼で見る俺を無視して、事実をつかれ怒る山城に話を続ける。

「山城さあ。そろそろ髪の毛戻しなよー。あつし、友達からも後輩からも頼まれてんだから『カッコいい山城くん、センパイに戻してー』って。てかマジいい加減、オマエは身を固めろ。映子ちゃんを解放してやりなつて」

「——なっ、なんだと!? 人聞きの悪いことを言うなっ!!」

「なーんで引く手あまたの男がシスコンなのかね。色々神様は不公平だな」

「おい空河」

俺はぎゃーぎゃーうるさい山城を制して話しかけてみたが、果たして、無視。なので息をはき、心を落ち着けてから、再びトライする。

「……お前さあ。このままずっと、冬休みまで口きかない気なの? なに怒ってるのかわらんが、いい加減機嫌直せよ」

「……なに? 今なんつった?」

突如振り向き、おおきな目をさらにはつちり開けて、引きつった顔で俺を睨みつける。久しぶりにきいた口と、見せた顔がこれかよ……。俺は空河を見上げ、苦々しく言った。

「……だから。機嫌直せつての。つーかなんで怒ってるのか言えよ。謝るからさ」

「謝る? ……いやいやいや!」

「いよいよ顔を引きつらせた空河は、首を振り振り、嘲笑を浮かべて言葉を返す。

「あっし、ぜーんぜん怒ってなんかいないし!! それどころか、よーやく冴えない友人に、待望のモテ期が訪れて喜んでるくらいだつーの。さあさあどうぞ、こんな平凡極まるわたくしなどより、『恵衣美ちゅわーん』と仲よくして下さいな。ほら、お昼には欠かさずメールとかしないとね! い・つ・も・通・り!!」

「……はあ? んなことしてねーよ! つーかなんだその言……」

と、言いかけて、口を閉じる。しばらくのち、俺はヤツを指差した。

「お前、ひよつとして……。俺に、先に恋人できるかもしれない、つてことが気に入らないの? 『自分にいないのに、できたら生意氣!』とか言つてたしな。……あのなあ、恋人もなにも、彼女とはさ、まだそんなに付き合えないんだぜ?」

「……………は?」

空河は瞬き、かぶりを振つて、おおきく息をはく。

「……このとーへんぼくは……。というか……。聞いた山城? 『まだ』つて言つたよね? はは……。コイツつてはマジ、ゲットしに行く気満々だよ。……そーいや田所に聞いたけど、恵衣美ちゅわーんつてば、ちよー可愛くてお嬢様で、その上、偏差値七十の豊高生なんだつて? それにちよつかい出すなんて、いやはや……。あつしが同じ立場なら、とつても真似できないね! おこがましくつて!」

「……お前ねえ、そりゃひねくれすぎだろが!! ちよい可愛くねーぞコラ!!」

「……! はいはいどーせあつしは偏差値高くないしー!? お嬢様でもないしー!? これっぽっちも可愛くなんかありませんよお——つだ!! これで満足かあこーの寝ぐせバッチリ頭っ!!」

「はいはいストップ。いい加減にしるお前ら」

山城がため息をついて、至近距離で睨み合う俺と空河を引き離れた。う……コイツのデカイ手を頭を押さえられると、なんか怒気が吸い取られていくんだよな……。

空河も同じよう、むき出しにしていた犬歯を、薄紅色のリップで隠してゆく。その頃合いを見計らい、山城は言った。

「空河さ。赤井がいつつも言ってるだろ。『縁』がどうのって。せっかくお前ら二年間同じクラスで、気の合うダチなんだから。それをしょーもないことでナシにすることないじゃん」

「しょ、しょーもなくは、ないよ！」

「赤井との関係をナシにするほどのもんか？　それは」

「う……」

「赤井も気持ちには分かるが謝れ。なにに対してかは、分かってるよな」

と、兄貴のような目で見おろす。それで完全に頭が冷えた。……そうだよな。つい血がのぼって、ひどいこと言っちゃまった。

俺は気まずそうにしている空河へ、ちいさく頭を下げた。

「……悪かった。可愛くない、とか言つて。ありやうそだ。お前は可愛いよ」

「……はあ？　ななななななと言つてんだよっ急に!？」

空河は一瞬で顔を赤くして、両手足をバタバタさせると、目を泳がせ下を向き、やがてチラチラ、こちらを見やる。二の句を待つようなその姿を見て、俺は息をはき、言った。

「……だから、見た目が可愛いって言ってるの。俺は好きだぜ。性格は可愛くないけどな」

次の瞬間、ヤツの平手が飛んできて、バチコンン！　という音を伴い、俺の頭は明らかに九十度以上回転した。ギャ————ッ!!

「……ってーな馬鹿!!　そーゆーところが可愛くないって分かんのか!?　だいたいお前は一週間に俺の頭を何回叩けば気が済むんだよっ!!」

「今週はひっさしぶりに叩きましたあー！　来週は上乘せしてやるから覚悟しろっ!!」

それで思いっきり舌を出して、あかんべー。……コイツは小学生か？　山城以前にお前が早く身を固めるよ。……しかし田所含めて俺ら、将来皆、独身だったりして、な。はは……。

「帰ったよ〜ん。おつ、なんか盛り上がってるね〜！　まぜてまぜて！」

と、なんとも言えぬタイミングで、学ランに趣味の悪い真っ赤なコートをひっかけた、混沌皇帝が戻ってきた。右手にはコンビニの袋……はまあ分かるとして、左手に、どう見てもケーキのハコにしか見えないものを提げているのだが……。

「あ、なーにじつと見ちゃって。心配しなくてもワンホールあるから赤井にもあげるって！　山城も食う〜？」

……やはりか。しかもワンホールって……。俺は半眼でかぶりを振り、山城は「映子に持つて帰るから、余ったらハコごとくれ」と、指を一本立てて、カッコよく要求していた。

「わーいあつしにもちよーだいい！ ね、ね、なにケーキ？ つかどこの？ あつしのオス
スメはねえ、ブックス高見沢の隣の、S A K A I ってとこ！ この間おかーさんで行ったん
だけどさーバリウマ！」

「残念でした」。オレが買ったとはは、森本薬局の隣の隣、甘味社で「す」

「えっ？ あそこまだやってたの!? おじいちゃん生きてる？」

「うん。髪の毛増えてたよ」

「マジで!? きょう部活終わったら友達と見に行こうと!! ねね、なにケーキい？」

傍若無人のふたりが失礼な会話を交わしている横で、俺が昼飯を再開すると、いつの間
にか食べ終えた山城が、白いナプキンできちんと弁当を包みつつ、ふたりに聞こえぬよう、
そつと俺の耳元へささやいた。

「恵衣美ちゃん可愛くていい子じゃん。詠羅ちゃんも感じよかったし……。ここはさ、お前
がいつも言ってる『縁』とやらを大事にしたほうが、いいんじゃないの？ ……あと、空河
はああ見えて、けっこう淋しがりやなの、お前よく知ってるだろ。その辺ちゃんとしとけよ」



そして、放課後――。

俺はクラブへ行こうとする空河に、「また今度、皆でどつか遊びに行こうぜ。最近こ
無沙汰だったしな」と声をかけてみた。するとヤツはギョツとした目でこちらを見、すぐ横
を向き、「あ、あつしは多忙の身だから！ 今からだと冬休みしか空いてない！」と言った。

なので俺は「それでいい。楽しみにしてるよ」と答えたが、そう告げるや否や、空河は、

「……また月曜っ！ おなか壊して休むなよっ！」

と言い、ダツシユで教室を出て行った。……な、なんだ？ 変なヤツ。

ちなみに空河のクラブは「カラオケ部」という、高校生にあるまじき部活動で、ヤツ以下
男女九名が、毎日放課後、第二音楽室を占拠して、カラオケセットで歌いまくるとい
うものである。誰が作ったのかは言うまでもない。

俺は鞆をひっかけ教室を出た。クラブやらデートやら青春らしい時を過ごさんとする生徒
たちを避けながら、廊下を渡り、階段をおりる。そうして昇降口で、ずらりと並ぶ鉄製の
下駄箱群から、自分のものを認め、手をかけようとした……。のだが。

やや離れた所で、藍の着物に白い腰エプロンの女性が立っていた。百七十センチくら
い……。つまり俺と同じくらいの背、短い黒髪は軽く分けられており、目はぱっちりとして
おおきいのだが、ほとんどまばたきせず、空を見ていた。通り過ぎる生徒たちも、その出で
立ちと、発する独特の雰囲気、誰もが目をやる。まあ俺もそのひとりなんだけど。

しかしきれいな人だなあ。雪のような肌、すらりとした立ち姿。二十七、八歳くらい？

まさに成熟した大人の女性、って感じ。

目を奪われていると、美人は急にこちらを向き、黒曜石のようなふたつの目が、俺の視界と合致した。——うわびつくりした！

その人はまばたきせず、俺と目を合わせたまま、白の草履を音もなく進めてゆき、こちらへ近づいてくる。俺はあまりのことに身動きできず、けっきょく、彼女は人ひとり分の間を空けて、歩を止めた。

「赤井公様ですね」

「……………そうです、が」

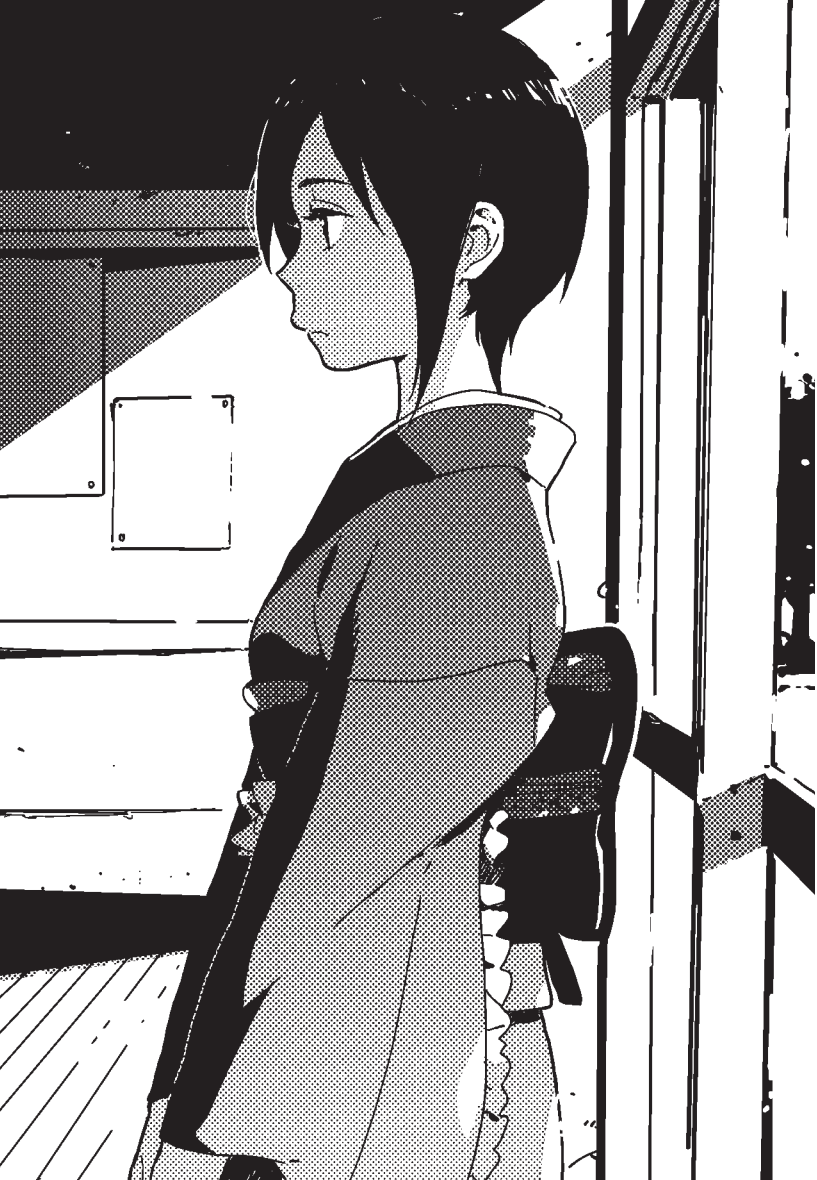
こわばった顔で、なんとか答える。女性は相変わらずまばたきすることなく、淡々と、二の句を告げた。

「わたくし、田所家で家政婦をしております山寺愛子と申します。実はこれから、祐一様のアパートへお荷物をお運びするのですが、もしお時間よろしければ、お付き合い願えませんでしようか」

……………こういうの、ウイスマーボイス、とかいうんだっけ。ささやくような声。……………えーつと。それはともかく。まさか田所家の人だったとは。……………どうしたらいいんだ。

返事待て彼女に、俺は苦笑しつつ、頭をかいて言う。

「あー。ひよっとして、ですけど。タドコ……………祐一君が俺を？」



「いえ。祐一様には、きょうお荷物をお運びすることは、ご連絡致しておりますが、貴方のことは、詠羅様がお目にかかりたいとのことで、わたくしの独断で、お荷物の件に伴い、お願いに参上致しました」

「えっ?」

「まあ正しくは、詠羅様のほうから……ではなく、わたくしのお誘いに応じて頂いた、という経緯ですので、どちらかと言えはわたくしが赤井様に、お目にかかりたかったのでございますが」

俺はまばたきせぬ彼女の前で、瞬いた。

「あの……。えーっと」

「山寺です。愛子と呼ばれることがほとんどなので、そちらでも」

「やま……愛子さんは、俺のこと、ご存じだったんですか?」

「はい。お名前だけは以前より、祐一様から伺っておりました。そしてつい最近、恵衣美様と詠羅様のお話に、貴方のことが出ていらしたので」

と、言って、また黒曜石のような目で俺を見る。う……。な、なんでそんな、観察するように俺を見るんだこの人。あんまり快く思われてないっぽいような。

俺はその視線に耐えきれず、反射的に言った。

「わ、分かりました。お付き合いします。きょうはヒマですから」

「ありがとうございます。ではこちらへ」

俺は愛子さんに連れられて、来客用の駐車場までやってきた。何台か停まっていたが、その中に真っ赤な軽トラックが一台あり、その荷台にはちいさめの、黄色い2ドア冷蔵庫が立てたままロープで固定されていて、まさかと思ったら彼女はそこに歩いていった。荷物つて冷蔵庫のことなのね。あれを運ぶために俺、呼ばれたのかな。しかし赤い軽トラなんて初めて見たよ。

車を見つめる俺をよそに、愛子さんは軽トラに乗り込み、反対側のドアを開ける。そうして車内からまた、くだんの両目で俺を見たので、思わず顔を伏せて乗り込んだ。

赤い運送車は登下校によく通る坂道の反対側を走り、ゆつくりと住宅街を進んでゆく。はだかになった並木の枝が、冬風に揺れるそばを、しずかに走り続けた。

愛子さんは車内でも背筋をピン、と伸ばしたまま、まっすぐ前を見据え、無言。呼吸をしているのだろうか、と思うほど表情も変わらないし、正直気まずいことこの上ない。俺はわざとらしく咳をすると、にこやかに話しかけた。

「えー。こ、この車は、田所家の業務用車、とかですか?」

「いいえ。わたくしの私用車です。仕事にも使いますが。乗り始めて、もう三年になりますね」

「あ……そうなんですか」

「おおきな買い物もできますし、便利でございますから。それに目立つ色なので、他の車や歩行者の注意も促せて、安全面でも気に入っております」

と、相変わらずのウイスバーボイスで、淡々と、涼やかに、前を向いたまま話す愛子さんに無口な人ではないようだった。俺は少しリラックスして、相槌を打つと、話を続ける。

「そういうえばさっきは俺のこと、よく分かりましたね。下駄箱の番号とか、田所に聞いてたんですか？」

「はい。それと祐一樣にお教え頂いた、赤井様の特徴をもとに、お声をおかけしました」
「へ。俺の特徴ってどんなんです？」

そう笑顔で尋ねてみた。すると愛子さんは前を向いたまま、同じ顔のまま、言った。

「御髪をおおらかにまとめられていること、上履きの踵を踏まれていること、ズボンのポケットに、親指だけを入れておられること……などでございます」

「は、は。……なるほど」

「あと、雰囲気ですね。祐一樣、恵衣美様、詠羅様が共通して仰っていたのが、『バリアがない』ということでしたので」

……な、なんじゃそりゃ。よく分からんが、悪い意味ではない……よな。

俺が苦笑していると、愛子さんはハンドルを左に切り、住宅街の細道から、やや広い県道

に車を入れた。そして少しスピードを上げ、ゆるやかにくだり道を走ってゆく。俺は対向車が何台か通り過ぎたあと、再び話しかけた。

「あの。ひよつとしてこの間の引越しも、愛子さんが？」

「はい。その節はお手伝い頂き、誠にありがとうございました。荷解きについても、わたくしが致すつもりでございましたが、それは赤井様、山城様と一緒……と、祐一樣たつてご希望でしたので、遠慮させて頂きました。申し訳ございません」

と、頭を下げる彼女に、俺は慌ててかぶりを振った。……あの野郎、やはりぐうぜんを装ったのか。くそう。まんまとだまされた。

俺はため息をついて、話を続ける。

「じゃあ荷台の冷蔵庫も……彼の実家から？」

「はい。祐一樣がご使用になつていたものです。お引越の際、ワンドアのものを持って行かれましたが、やはりこちらがいい、とのことだ」

「そうですか……。でも引越したアパートって、実家からそんなに離れてないですよね。うちの高校に寄られるのは、すごく遠まわりなんじゃ……」

「そうでございますね」

と、ひとこと。二の句はなかった。……どういうことだ？ まさか俺とドライブしたかった……なんてこと、あるわけないし。やはり冷蔵庫を部屋へ運ぶため、呼ばれたっぽいな。

それきり俺は黙り、愛子さんも、しばらくはハンドルに白い手をかけたまま、相変わらず表情を変えずに、無言で直進していたが、信号をひとつ通り過ぎたところで突如、口を開いた。

「赤井様。貴方は恵衣美様と詠羅様について、どう思われますか」

「——え？ あ、その……」

とつぜんのに、言葉がつまる。俺は頭をかき、愛子さんの横顔を見やった。

「いい子たちだと思いますよ。……ですけど」

「なんでございましょう」

俺はツバを飲み込みつつ、彼女の白い横顔に、言葉が続ける。

「……こんなこと会って聞かない方にお聞きするのもあれなんですけども。田所にも本人たちにも聞けないことなんで」

「はい」

「恵衣美ちゃんと詠羅ちゃんは……なぜあんなに仲が悪いんですか？」

ちよどこそこで、ふたつ目の信号に差し掛かるが、赤だった。車はゆつくりと速度を落とし、停止する。愛子さんはまっすぐ前を見る姿勢は崩さず、ぼつりと言った。

「誤解ですね」

「？ ……それは仲が悪い、というのが、ですか」

「いいえ。お互いに、お互いを、誤解し合っている、ということでございます」

エンジン音と振動が体に伝わるのを感じながら、俺は愛子さんを見る。彼女はまったくこちらを見ずに、ハンドルに置いた両手の親指を、右、左とわずかに動かして、言葉が続けた。

「恵衣美様は、詠羅様がいい子を演じて、家の愛を独占していると思込んでいます。詠羅様は、恵衣美様がわざと家を引きかきまわして、楽しんでいると思込んでいます。もっともわたくしが十年間、おふたりをお世話した限りの見解でございますが」

「……話し合う……というのは無理、です……よね」

「はい」

即答される。そして車は動き出した。少なくとも十年以上そうなのに、我ながら馬鹿馬鹿しいことを言ってしまった。

「ただ、方法がないわけではありません」

「え！ なんですか!？」

と、思わず身を乗り出してしまい、愛子さんはその時初めて、ほんのわずか、表情を崩して、俺の顔を見た。

「……ずいぶんと、ご関心がおありのようですね。……なぜですか？」

「それは……やっぱり姉妹で仲悪いなんてよくないと思いますし」

「貴方には関係のないことだと思われませんが」

「……そんなことないです。一緒に飯も食いましたし、笑いましたし、トランプしましたし……つまり友達ですよ」

「お友達……ですか」

「はい。あのそれで……方法というのは」

俺は真顔で彼女をのぞき込んだが、愛子さんはそれに応じることなく、淡々と、表情を変えぬまま、例のウイスパーボイスで言葉を返した。

「申し訳ございませんが、お伝えすることは致しかねます」



十五分とかからず、田所のアパートに着いた。俺は愛子さんと同時におり、荷台へまわる。ロープに手をかけようとしたが、これ、どうやって解いたらいいんだろう……とわずかに躊躇していたら、彼女がさっ、さっ、さっ……あつという間に解いてしまった。

愛子さんは、その手際に見とれていた俺へ、犬のキーホルダーがついた鍵を差し出した。

「お部屋の合い鍵です。これでドアを開けておいて頂けませんか」

「あ、はい」

これは……今行けつてことだよな。なにか電話かけたとか、用事あるのかな。

そう思い、俺は早足でアパートへ向かい、カンカンカン、と階段の中頃までのぼったのだが、ふと車のほうを振り向いてギョッとする。なんと愛子さんは、荷台から冷蔵庫をひとりで持ち上げて、それを下におろすこともなく、また底を抱えるのでもなく、挟み込むように両サイドを平手で押さえたまま、こちらへ歩いてきた。——いや、いや、ちょっと待てっ!!

俺はマッハで階段を駆けおり、彼女のもとへ。慌てて冷蔵庫の底をつかんだ。が、

「ご心配なく。大丈夫です」

「いや、いや! これちいさいだったって……三十キロはあるでしょう!?!」

「およそ四十キロ弱ですね。ともかくご安心を。唯一の取り柄でございますから」

そう淡々とウイスパーな声で仰る愛子さん。冷蔵庫のせいで顔は見えないが、おそらく表情ひとつ変えていないものと思われる。……マジか。マジで重くないの?

けつきよく、俺は愛子氏の無言の圧力に耐えかねて手を離し、指示通り鍵を開けにゆく。その間ずっと、ハラハラしながら見ていたが、踊り場のない階段も悠々とのぼり、廊下も特に足音を立てることなく、彼女は開け放した田所の部屋へ入っていった。キッチンにおろす時も、音はなかった。

呆然とする俺を尻目に、愛子さんは冷蔵庫の扉を固定していたガムテープをビリビリはがすと、それを流し横のゴミ箱に落とし、

「詠羅様にお電話致しますので、少々お待ち下さいませ」

と俺に告げ、赤い携帯を取り出しつつ外に出て、ドアを閉めた。

ひとり残され、俺は流しの窓から差し込む西日に照らされた、黄色い冷蔵庫を眺める。そして思わず、愛子さんがしていたように、両サイドに平手をはりつけて、グッ……と力を込めるが、

「うぐっ！　ぐぐぐぐぐぐ！　——ぐはっ！」

果たして、ほんの少し浮いたのみで、あえなく撃沈した。……な、なんなんだあの人は。もしかしてあの着物の下に、ものすごい肉体が隠されているのだろうか。

しばらくのち、愛子さんが戻ってきた。手に俺の鞆、そして紫の風呂敷包みを提げている。彼女は音もなく草履を脱ぐと、足袋をしずかに進めて、俺の前へ来た。

「もうすぐ来られるそうです。今お茶の準備を致しますので。これはお鞆です」

「あ、すみません。……あの」

「なんでごさいましょう」

「すいすいすね……。その、力」

我ながらものすごく間の抜けた口調で、かつ失礼なことを言ってしまったが、そんな俺の無礼にも、愛子さんは表情を変えることなく、「いえ」と短く返し、ちいさく頭を下げる。

それから彼女は、何事もなかったように、流し台にあったヤカンを手に取り、浄水器のついた蛇口をひねると、軽くゆすいでから水を入れて火にかける。そうして炎を少しの間眺め

つつ、俺に背を向けたまま、言った。

「……お試しになりますか？」

「えっ？」

瞬く俺と、火あぶりされるヤカンをよそに、愛子さんは六畳間へ。やむなくあとに従うと、彼女は部屋の入り口側に腰をおろし、コタツの前に正座した。なので俺は恐る恐る反対側の、彼女の正面に腰をおろす。

愛子さんは袖口から、すばやく紅いヒモを取り出して、あっという間にたすき掛けをした。そうしてまったく筋肉質でない、実に女性らしい白雪の細腕をあらわにし、しずかに卓上へヒジを置く。てのひらは、開かれていた。それは明らかに「腕相撲」の準備以外、何物でもなかった。

「ご遠慮なさらず、どうぞ。思い切り」

と、ウイスパーボイスで告げる愛子さんの顔は無表情で、黒曜石のように輝く美しい目だけが、じっと俺をのぞき込んでいる。それに引き寄せられて、俺はおずおずとブルゾンを脱ぎ、手を重ねた。

彼女のてのひらは、ひんやりとして、繊細で、やわらかい。きちんと手入れされた爪は、あざやかな薄桃色の艶を帯びている。俺は直接伝わる彼女の存在に少し緊張して、ごまかすよう言葉を放った。

「あ、あの……ええと。号令とかは、どうしましょう」

「そうでございますね。では僭越ながらわたくしが……よいい。始めっ！」

「——っ!!」

「……と、申したらお始めになって下さい」

「のわあ~~~~~~~~っ!!」

俺は卓上に、頭をぶつけるいきおいで突っ伏した。こ、この人も……冗談言うのね。俺のリアクションを見ても表情は変わらなかったが……どういう時に笑うんだろう。

「失礼をば。では今度こそ。よろしゅうございますか」

「……はい」

俺はツバを飲み込んだ。愛子さんの表情を見つめ、肩、ヒジ、手と力を伝えて、いよいよ緊張感が高まった次の瞬間——。

「……よいい。始めっ！」

「——どらあああああああああああああつ！ あ……あ。あ………」

と、勇ましいさげび声は響いたが、肝心の手が動かない。俺の腕は、愛子さんの白雪のようなそれを、一センチも動かすことができなかった。な、なんじゃこれは……卓から鉄の棒でもはえてるとしか思えんぞ！

「まあまあですが……普通の高校生男子より少し上、といったところでございますね」

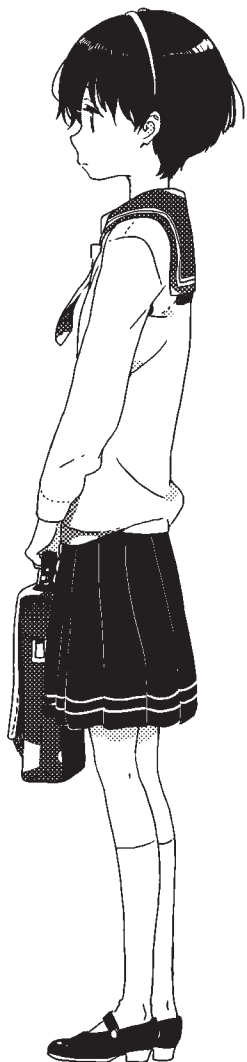
愛子さんはそうつぶやいて、相変わらずまったくまばたきすることなく、一、二、三、とていねいに、段階をふむよう俺の手を押しやり、あっさりと勝利。戦意喪失する間もなく、俺は敗れ去った。……ガン。

「どうかお気になさらずに。わたくし、負けたことございませんので」

「そ、そうですか……」

手のしびれが、言葉の正しさを裏付ける。うう……誰にも言えねえな。けっこう力はあるほうだと思ってたけど。たまにじゃなく、本格的に筋トレとか、始めようかなあ……。

愛子さんはしょんぼりする俺をじっと見つめたあと、紅ヒモを解き、それを袖口にしまった。それから「お茶をご用意します」とつぶやいて、音の鳴るヤカンのほうへ歩いていった。



第5章〜恋のタイムセールは早い者勝ち〜



愛子さんがヒーターのスイッチを入れ、紫の風呂敷包みから竹カゴを取り出し、そこから湯飲みや急須、茶筒を卓に置いた時、携帯のバイブ音が聞こえた。彼女のだ。

「失礼致します」

と言って立ち上がり、愛子さんはエプロンのポケットから赤い携帯を取り出す。よく見ると、ストラップは犬だった。合鍵にもついてたけど、好きなのかな。

キッチンでしばらく話し、彼女は戻ってきた。

「詠羅様は今、桜野スパーにおられるそうです。ですのでわたくし、今から」

「あ、そうですか。じゃあ俺迎えに行きますよ。……って、あ」

遮るよう、つい言ってしまった。なので苦笑しつつ、言い直そうとしたら、

「……。では、お願いしてもよろしゅうございますか」

と、赤い財布とメモを渡された。……あれ？

「詳しいことは、詠羅様にお尋ねになって下さい。お気をつけて」

玄関を出て、階段をおり、アパートを離れ、最寄りの角で振り返っても、愛子さんはドア先に付んでいた。相変わらず黒曜石のような目で俺を注視してたけど、いつもあんな感じに田所家の人を見送ってるのかな。

もう紅色の街を、のんびり歩いた。そのそばを、子供たちが冬風と通り過ぎ、家をへだて

る細道へ、いきおいよく走ってゆく。……しかし詠羅ちゃんはなんで来たんだろう。この間はちよつと気まずい感じで別れたのになあ。

十五分で桜野スパーへ。ここは一階に食品、二階には洋服や雑貨などあつて品揃えがよく、けっこう繁盛している。映子ちゃんの行きつけでもあるから、俺にもなじみがある店だ。

夕暮れの内、きよろきよろするが、出入りする親子連れや主婦、お年寄りの姿はあれど、詠羅ちゃんらしき女の子が見当たらない。……おかしいな。中にいるのかな？

俺は自動ドアをくぐり、付近を捜し、食品売り場をくまなく歩いた……が、出会わない。うう、こういう時に携帯の番号知ってたら、便利なんだけど。

やむなく二階へのエスカレーターに乗った。のぼる途中、前を見ると、くだる隣のエスカレーターから、誰かがおりてくる。その子は白い巾着袋を前に提げ、紺色の……辺りではめずらしいワンピース型セラー服を着ていた。

アウターには巾着と合わせたような、上品な白カーディガンを羽織り、肩にディーブスカイブルーの水兵襟をかぶせて、胸元には白ネクタイを下げている。夜空に輝く月のよう、凛として佇むその少女は……詠羅ちゃんだった。

「……あ」

「！」

俺の間抜けな声に気づいた彼女は、交差し、すれ違ったあとでも、おりゆく階段上で何度もこちらを振り返り、艶のある短い黒髪の上で、こはく色のカチューシャを美しく光らせながら、下まで流れていった。俺はすぐさま駆けのぼり、くだりのほうへ飛び乗ったが、彼女も同じようなことをしており、俺たちは立場が逆になっただけだった。

「おりて、おりて！」

「いえ！ 逆方向に動くわけには……！」

「じゃあ俺が……」

「——駄目です！ 危ないですから！」

そう言い合ったところで、俺たちは再び交差した。間抜けなやりとり思わず噴き出すと、「なにがおかしいんですか」と、詠羅ちゃんは少しふくれた顔をして、上に流れていった。

けつきよく、彼女がおりてきた。頭をかき、挨拶しようとする、赤井様。エスカレーターで逆に動くのは、とても危険です」と、小学生のように注意されてしまった。

「……ごめん。気をつけるよ。……はいこれ」

俺は苦笑して、利用客の邪魔にならないよう、動く階段から彼女と離れ、愛子さんの財布とメモを手渡す。彼女はそれをしずかに受け取った。

「ありがとうございます。……あとお久しぶりです」

「うん。……元気だった？」

「はい……」

そう、やや遠慮がちな挨拶を交わしてから、少し黙る。俺はその沈黙を嫌うよう、すぐ声をかけた。

「そういうなんで二階に？ なにか探し物？」

「いえ……。このようなお店に、あまり来たことがないので、色々見てまわっております」

「そ、そう……」
 そうしてまた、沈黙。その気まずさから逃げ出すため、必死に俺が二の句を頭で転がす間、詠羅ちゃんはちいさな白紙に目を落としていたが、しばらくのち、財布と共に巾着へしまつて、顔を上げた。

「……赤井様。その。あの……。今晚、お時間ありますか」

「え？ ああ……八時までに帰れたら」

「——はい、それで大丈夫です！」

おおきな声は、果たして辺りの目を引いた。なのですぐ彼女は「す、すみません！」と頭を下げたが、それはいよいよ響き渡って、俺たちはいつそう好奇の的となった。

「す、すみません……。ともかく、それで大丈夫……ということですので」

そう、詠羅ちゃんはゆっくり姿勢を戻し、つぶやいたが、顔はそばのトマトより赤かった。

俺は妙な空気をごまかすよう、大仰に辺りを見まわして、冗談まじりに言葉を投げる。

「そ、それでさ……どうしたの。ひょっとして、その財布とメモって晩御飯の買い出し用？俺も飯にまぜてくれるとか。ラッキー！ なーんて」

すると彼女は、まだ赤みを残した顔のまま、うなずいた。

「その……駄目でしようか」

「いやいやいや！ まさか！ 嬉しいよ。……でもなんで？」

「はい……。実は先日、愛子さんに聞いたのです。月曜日のこと。それで……」

「……それって、恵衣美ちゃんのこと？」

彼女は再びうなずいた。そして、もとの色に戻った顔を、こちらへ向けた。

「晩御飯をふたりで、楽しく食べられたとか……。それで私、日曜に、せっかく赤井様が家まで送って下さると仰ったのに、変な意地で断ってしまったことを……後悔したのです。エイミの話を聞いて……とても焦りました。なので、ともかく私も、赤井様ともう一度、御飯を一緒に縮めたいと……うまく言えないのですが、そのようにしなければならぬと思っただけです」

詠羅ちゃんはうつむいた。……もしかして、恵衣美ちゃんへの対抗意識……みたいなもの、なのかな。仲が悪いから、ともかく、なににおいても、というような。

「あの。これは単に、エイミに対抗したいからとか、そういうことではありません」

と、すぐ真顔で返された。……やっぱり俺って考えることモロばれなのね。

「その……なにかは分かりませんが、もっと違う、胸の奥から響いてくる、別の感情なので。大切な」

そう言っただけ、彼女は胸を押さえた。騒がしい周りは、俺たちの袖をなでるよう過ぎてゆく。俺は雰囲気の変った彼女に、わずかに動揺していた。が、そこで――。

《ピンポンパンポン……》

と、空気の読めない音が鳴り響いた。

《いつもご来店ありがとうございますーただ今よりお肉のコーナーにてえー全品四割引のタイムセールを開始致しますうー》

その中年男性による早口の、何度か耳にしたことのある店内放送が終わるか終わらないかというところで、辺りの主婦らがぞろぞろとくだんの売り場へ移動し始めた。その様子に、詠羅ちゃんが不思議そうな顔をする。

「あの……今のは？」

「タイムセールだよ。十五分くらいかな？ この店の場合、指定された売り場の商品が割引されるんだ。きょうは四割引みたいだなあ」

そう、店のまわし者よろしく説明してから苦笑した。馬鹿か俺は。つい流れで言っただけ……と思っただけ、彼女は、

「——それは行かなければ！ 赤井様、カゴを！」
 と、俺を置いて早足でスタスタ歩いていった。えーっ！ ちよつとキミ！
 俺は慌ててそばの蒼いカゴを取り寄せて、ちいさな背中を追いかけた。

肉売り場はすでに主婦らしき人たちが埋まっていた。詠羅ちゃんはその間に割り込もうと
 しては躊躇して、びよんびよん飛び跳ね人壁越しに、肉をのぞき見ようとする……と、いう
 ことを繰り返していた。なので見かねて呼び寄せる。

「あの、俺が取ってくるから。肉の種類言つてよ」

「いえ、ここは私が！ ……将来の練習ということもありますし」

「えっ？」

「……なんでもありません！ とにかく私が……」

そう言いながら、やはり割り込もうとする↓できない↓飛び跳ねる↓割り込もうとす
 る……を繰り返していたので、俺はため息をついてから、騒がしい人壁に押し入り、

「ちよつとすみません！ すみません……！ 詠羅ちゃん！」

「は、はい！」

と、呼び寄せて、左右の人に頭を下げつつ、満員電車で連れをかばうよう空間を作り、
 彼女を騒がしい群れの中に引き入れた。

「……えっと、これは国産豚のバラ肉だな！ 五百円!? つーことは……!」

「四割引ですと三百円になります！ すこい！ とつてもお得なんですわね!」

「あのさー！ 飯って俺と、キミと、愛子さんと食べるの!? 田所は!?」

「お兄様は帰りが遅くなるそうです！ お友達とお食事されるようで!」

「そう！ じゃあ三人分か！ ……四百グラムくらい!?」

「いえ！ 一キログラムは！ 赤井様は育ち盛りですから!!」

確か恵衣美ちゃんにも言われたような……。年下の子に言われる俺って……なんかガツガツ
 してそんな雰囲気でもあるのだろうか。

俺たちは人壁に何度も割り込んで色々な肉を見、詠羅ちゃんにメニューを聞いては大声
 でやりとりし、けつきよく、から揚げとこと鶏のモモ肉を八百グラムほど取ってきた。
 正確には、迷っている間に目当ての品は全部取られてしまったからだが。

「ひゃー。すごかったな」

「は、はい……。でも面白かったです」

と、彼女は笑った。やや疲れていたからか、あのニヤツ……とした笑い方でなく、自然な
 笑みをこぼしている。特売肉のバックを抱え、乱れた髪のまま無邪気に笑う彼女の姿に、
 思わず胸が鳴った。う……これは……。

俺は自分でもよく分からないそれを、慌ててごまかすように、彼女の頭へ手を伸ばし、

カチューシャに触れないよう気をつけて、髪を整えた。

「あっ……」

「……うむ。これでよし。……ん？」

彼女は、トマトのような顔で固まっている。それを見、初めて自分のしたことに気づいた。
「……あっ！——すまん！あの……マジでごめんなさい！」

すぐ直角に頭を下げた。気恥ずかしさから、しばらくそのままにしていると、白くちいさな手が、しずかに、足もとのカゴへ肉を入れる様子が目に映る。そして、自由を得た華奢なそれは、やがてゆつくりと俺の顔を包み、持ち上げて……俺は詠羅ちゃんと目が合った。

「えっと……あの」

「赤井様の……このはねた毛は、寝ぐせなのですか？」

詠羅ちゃんはそう聞きつつ、切れ長の目を瞬しほいて、真顔でじつと髪の間を見つめ、俺のぼさぼさ頭をていねいに、やわらかな手でといた。

「……終わりです。これでおあいこですね」

と、彼女は明るい顔で俺を見る。それにつられるよう、俺は笑みをこぼした。



店の外は、もう暗かった。詠羅ちゃんが愛子さんに電話をかけている間、俺が少し離れた
 外灯のもとで、白い息をはいていると——携帯が震えた。

恵衣美ちゃんからのメールだった。……件名は「コウさん」。本文は、「今どこですか?」。
 なので、俺はすぐに、「桜野スパーつてとこ。田所のアパートから十五分くらいかな。
 どしたの?」と、返事を出した。

すると、返ってきたのは……〈ふーん〉。

それきりだった。俺はしばらくその文字を見つめたあと、携帯を閉じて、息をはく。

山城はメールをやりとりしていることに、さも意味ありげみたく言ってたけど、彼女のメー
 ルはいつもこんな感じで一方的だし、内容もたわいもないことばかりだ。メールはあっさりし
 てる子なのだろうか。

そういうや空河のメールは〈この菓子ちよーうまい! うらやましいかHAI〉(*うざい写真
 つき)とか、口調が男のそれとしか思えないし。……なんか俺、女友達がいる気しないな。

そんなことを思いつつ、携帯片手にぼんやり立っていると、詠羅ちゃんが襟とネクタイを
 揺らし、駆け寄ってきた。

「お待たせしました。……赤井様もお電話していたのですか? お友達?」

「いや。メール。恵衣美ちゃんと……」

と、言った瞬間、彼女の目つきが暗転したのが伝わってきた。し、しまった——っ!!
 阿呆か俺は!!

果たしてさっきまでの明るい雰囲気はどこへやら、おそらく本人は自覚がないであろう、
 ものすごい顔でうつむく彼女。俺は恐る恐る、話しかける。

「あ、あの……。もしよかつたら、だけど。詠羅ちゃんも番号の交換とか……しな」

「私、不純異性交遊を嗜む余裕はありませんので」

0・01秒で拒否された。ぐわーん!

彼女はそのままクルリと背を向け、スタスタロボットののような規則正しさで歩を進めて、
 かつ、親の敵に向けてようなオーラを放ち離れてゆく。こ……怖えええ!!

俺は暗黒気に気圧されつつも、慌てて彼女の背中を追いかけた。

「ちよつとストップ! 待ってくれ!」

「嫌です」

はたから見たら競歩の訓練をしているとしか思えないほどの早足で、俺たちは歩き続けた
 が、運よく信号が赤に変わったところで、彼女は止まってくれた。

「はあ……。あのさ。さっき不純って言ったけど……。俺は詠羅ちゃんと仲よくなるのは
 そうだと思わないよ。……詠羅ちゃんは俺とタチになること、そう思うの?」

「——そんなことは!」

と、ようやく彼女は振り向いて、こちらを見る。が、すぐ顔をそむけ、口をとがらせ気味に続けた。

「……様が……いんです。……きに……イミと……るから」

「? な、なに?」

「……赤井様のでんてんはか~~~~~」

えっ? な、なんじゃそりゃ——っ!?

俺が混乱していると、彼女はおおきなため息をついて、髪を揺らし、えらくすつきりした顔で、こちらに向き直った。

「……すみませんでした。子供みたいなことを言っただけです。その……私も……交換したい……です」

「……いいの? ありがとう!」

そう笑顔で答えると、彼女は再び横を向き、瞬いて、白い巾着袋から、たくさん人形がついた愛らしいピンクの携帯を取り出した。

アドレスを交換後、道路を横断して、「てんてんはか」の意味を聞くと、俺は彼女から初めてのメールももらった。届いたそれは件名もなく、ただ本文に「『は』にてんてんを……」と、書かれており絶句する。送り主を見ると、気まずそうに目をそらし「……すみません」とつぶやくので、俺は苦笑する他なかった。

「はは……。それって詠羅ちゃんが考えたの? 面白いね」

「いえ。愛子さんです。ちいさな頃、教えてもらいました。……面と向かって言えない時に」と

……なるほどね。今度俺も使おうかしら。

ほどなく車道沿いから外れ、外灯がともるしずかな街路を、ふたりでゆつくり歩いた。彼女は主に学校のこと……友達にこんな子がいるとか、古い研究部のメンバーは、こういう経緯で集まった……などを、とても楽しそうに話してくれた。俺はそんな詠羅ちゃんの横顔をニコニコ見ていたが、ふいに彼女は口をつぐみ、足を止めた。

「あの……赤井様」

「ん?」

やや遅れ、前のほうで立ち止まった俺に、彼女は重く尋ねてくる。

「エイミと御飯を食べられた時、あの人は……祖母の話をしましたか」

「……ああ。おばあちゃんだったって。すごく大切な人なんだなあと思ったよ」

「それだけですか? その、他には……」

「え? あ……。なよなよ後ろ向きだと怒る人、とか。だいたいそんな感じのことかな」

「そうですか……」

と行って下を向く。なにかを考えているようだった。

遠くから車の音が聞こえる。離れた外灯は、彼女のカチューシャに暗い光を与えていた。やがて詠羅ちゃん顔は顔を上げ、俺に向き直った。

「実は赤井様。その……祖母が私たちに残したことで……」

俺が不思議そうに詠羅ちゃんを見返すと、彼女はまた口をつぐみ、わずかにかぶりを振って、少し潤んだ目を落とした。

「……祖母にもらった、カチューシャのことなんですけど……とつても大事なんです」

詠羅ちゃんはそのまま動かなかった。なので俺は黙つてうなずき、しずかに買い物袋を置くと、そばの柵にもたれた。彼女も少しの間を空けて、俺に倣う。

「……祖母はたくさん装飾品を持っていて、エイミや私はちいさな頃からそれを見せてもらつては、サイズも合わないのに身につけて遊んでいました。でもこのカチューシャと、エイミのブレスレットは、遊びで触れることは許されませんでした。もつと値段の高いものは平気で遊ばせていたのに……。不思議に思いましたが、にこやかに首を振るだけで、理由は教えてもらえず……。けつきよく、分かったのは、祖母が亡くなったあとのことでした」

俺はうつむく彼女を見た。詠羅ちゃんはそれに気づくと、少しだけ視線を合わせ、天を

あおいだ。

「遺書に、書いてあったんです。どちらも若き日の祖父からの贈り物で、祖母のいちばん大切にしていたものであること。そして、それを私たちに遺す、ということ……。……当時、祖父はたいへん生活に苦労していたようで、勤め先の鉄工所から頂いた、わずかなお給金の中からこつこつためて、祖母にプレゼントしたそうです」

詠羅ちゃんはカチューシャを外し、白くちいさな手の中で、無邪気な子供が遊ぶように、外灯の光に当てて、輝きを見ていた。やがて、明るい顔で俺に向き直る。

「ふたりはお見合いではなく、恋愛結婚なんです。昔、祖母の住んでいた地域に、共同で使われていた井戸があったのですが、仕事帰りの祖父はいつも手ぬぐいを提げ、そこへ汚れを落とすにきていました。そして、その姿をよく見かけていた、農家の娘である祖母が恋慕い……。さいしょに聞いた頃、まだ私もちいさくて、よく分からなかったのですが、ただ、祖父との恋を話す祖母は、とても素敵だと思いました。そして、いつか私もあのようにと……」

詠羅ちゃんは、手の中に抱くカチューシャを、俺に差し出した。

「赤井様。……はめて下さいませんか」

「……あ……うん」

俺は、じつと見つめる彼女の瞳に吞まれ、こはく色の美しさを受け取り、それを風に揺れる黒髪に戻した。

「……ありがとうございます」

おれ こい お
俺はまだ恋に落ちていない 試読体験版

発行 2011年11月30日 初版第一刷発行
著者 高木幸一
発行人 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木2-4-5
電話 03-5549-1201
03-5549-1167(編集)

装丁 株式会社ケイズ(大橋勉/彦坂暢章)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをする
ことは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。

©Kouichi Takagi

Printed in Japan

GA 文庫